

都市計画家

# Planners

2016 WINTER

81



特集

## 全国まちづくり会議 2015 in 東京

### 「都市の未来を考える」

# 全国 まちづくり 会議 2015 in 東京

10月3日(土) 4日(日)

東京大学生産技術研究所

## 全国まちづくり会議 2015 in

今年の全国まちづくり会議は、10月3日(土)・4日(日)に東京大学生産技術研究所を会場として開催されました。

まず、ご来場いただいた多くの参加者の皆様、シンポジウムやフォーラムなどに登壇された方々、パネル展示団体として全国からお集まりいただいた方々、裏方として大会を支えていただいた東京大学の加藤孝明先生をはじめとする研究室のメンバーや実行委員のメンバーなど、大会を支え参加していただいた多くの皆様に深く感謝申し上げます。特に、練馬まちづくりセンターの小場瀬所長には大変お世話になりました。

全国まちづくり会議(以下:「全まち」)は、第4回目以降は地方での開催も行うこととなり、首都圏と地方を交互に開催することとしました。ところが、昨年までの3年間は神戸市、長岡市、北上市と3年連続で震災を経験した地域で開催したため、首都圏での開催は震災のあった2011年のさいたま市以来4年ぶり、東京での開催となると、第3回の工学院大学以来となる8年ぶりとなりました。

久しぶりの東京での開催ということもあり、また全まちが10周年を超えて11回目の開催となったこともあって、当初は新しい内容やプログラムも検討しました。例えば、近年は協会会員や学識経験者を交えたセッションが中心となりつつあることから、まちづくりを意識しつつ「都市計画」を全面に出すこともあ  
るのではないかと、などということも検討しましたが、色々議論・検討した結果、やはり家協会が存立する意義や役割を大切にすることが必要であろうということになり、結果としては全まちの本質に立ち戻って、草の根まちづくりの支援を基本とした大会とすることとなりました。ただし、折角の東京開催でもあるため、何かと暗い話題の多い最近の日本社会に向けて新しく明るい話題提供を行うことも必要であるとして、東京オリンピックを5年後に控え、世界の中でも注目される立場にある東京という視点から、未来の都市のあり方をみんなで考える枠組みを提供することとした次第です。また、学術の拠点である東京大学生産技術研究所での開催を意識して、アカデミックな内容も取り入

## Planners 81 CONTENTS

全まち会議 2015 in 東京特集

- 2 特集主旨 全国まちづくり会議2015 in 東京を終えて……石川岳男
- 4 全国まちづくり会議2015 in 東京イベント概要
- 6 シンポジウム「都市の未来を考える」……中川智之
- 8 フォーラム
  - 8 楠本洋二賞記念フォーラム……石川岳男
  - 10 JSURP レジェンドトーク Vol.1……菅原克
  - 12 第11回日本都市計画家協会賞……山重明
  - 14 日韓まちづくりセンターフォーラム……小場瀬令二
  - 16 地方創生フォーラム……西澤明
  - 18 東京文化資源会議学生セッション報告  
……寺田悠希/真鍋陸太郎/後藤智香子/小泉秀樹
- 20 JSURP 復興支援タスクフォースフォーラム……内山征
- 22 分科会
  - 22 ejob 事業の普及と発展に向けて……北北美江子/関宏光
  - 23 川から見る産業立地……千葉葉子
  - 24 緊急提言:庭の時代へ……野口由紀子
  - 25 「シネマティック・アーキテクチャ東京の描く  
都市・建築ヴィジョン」展……緒方恵一
  - 26 輪中会議・番外編……渡邊喜代美
- 27 セッション 東北カフェ&マルシェ及びランチセッション ……関口泰子
- 28 車座交流会・パネル展示
  - 28 広域まちづくり・地域密着まちづくり……平井一步/田嶋麻美
  - 29 まちづくり支援組織・韓国まちづくり……梶田佳孝/小場瀬令二
- 30 総括 全まち東京の成果と意義……小林英嗣
- 31 次回全国まちづくり会議の開催にあたって……赤阪忠良

裏表紙 2015年10月1日~2016年2月29日 協会の動向

# 東京を終えて

全国まちづくり会議実行委員会委員長 石川 岳男  
認定NPO日本都市計画家協会副会長

れることとしました。その結果、大会のテーマを『都市の未来を考える』とし、これまでの考え方にとらわれない新しい都市の未来像を模索することを目的に開催されたものです。



大会の冒頭では、野城智也先生による「イノベーションとまちづくり」と題した基調講演をお願いしました。ご自身の経験を踏まえたイノベーションの概念そのものに対する考え方は非常に斬新です。また、イノベーションはまちづくりそのものであるという指摘もあり、まちづくりに関わっている我々にとっては、非常に心強く、また気持ちを揺さぶるお話しをお伺いすることができました。

基調講演後のパネルディスカッションでは、パネリストの皆さんからこれからの都市づくり・まちづくりについて重要な視点がいくつも提示されています。協会としてはこれらの視点を一つひとつ吟味し、実践していくことが必要かもしれません。

その他、今回の全まちでは数多くのセッションが行われました。詳しくは後ろの頁に譲りますが、今回の目玉の一つとして、韓国からまちづくりに関わる方々をお招きして、日韓 まちづくりセンターフォーラムを開催したことが挙げられます。韓国のまちづくりがすごいスピードで発展してきていることは周知の事実ですが、実際にまちづくりに関わっている者同士が交流し、意見交換することで、全まち本来の目的である多様な交流の促進に寄与できたのではないかと考えています。また韓国のまちづくりセンターの皆様にはパネル展示にも出展していただき、全国から出展していただいたまちづくり団体等との車座交流会にもご参加いただいています。今回の取組は小さな始まりかもしれませんが、これからの日韓のまちづくりの新しい展開に大いに期待しましょう。

さらに、先進的・特徴的な取組を行っている地方自治体の方にご登壇いただき、地方都市の現状と取組を議論する地方創生フォーラム、学生を主体として東京の歴史・文化資源を掘り起こし、その利活用を考える東京文化資源会議学生セッション、未来の都市を模索

する前提として過去の都市計画を振り返り新しい時代への教訓と提案を議論するレジェンドトーク、そして協会が継続して取り組んでいる東北震災復興まちづくりに関するセッションなど、今の時代に意義あるセッションを数多く組むことができたと自負しています。

また、今年は2年に1回開催している日本都市計画家協会賞の開催年でもあり、全まちで各賞受賞者のプレゼンテーションが行われた後、閉会式にて日本まちづくり大賞の受賞者が発表・表彰されました。日本都市計画家協会賞は、こちらも全まちと同様の11回目を迎えることができましたが、草の根まちづくりが築いてきた市民社会の育成と発展は、まさにこれからの都市のあり方を先行しているものと言えるでしょう。

楠本洋二賞は昨年度の第6回をもって終了しましたが、今回の全まちでは過去の受賞者のフォローアップを兼ねた記念フォーラムを開催しました。

その他、多くの特色ある分科会も開催され、盛会の中で大会を終えることができたことを大変うれしく思うとともに、ご協力いただいた全ての皆様に感謝申し上げる次第です。



今回の全まちを通して、多様な立場の人々が様々な視点から都市の未来について考え、議論し、提案を行いました。ただし、それらは未来の都市を語るほんの一部にしか過ぎないでしょう。

その内容を膨らませ、肉付けし、魅力ある内容に仕立てていくのは参加者自身のはずです。全まちで語られた多くを胸に、未来の都市について思いを馳せ、そして実現に向けて一緒に活動してみようではありませんか？ 特に東京オリンピックまでの5年間は、色々な意味でこれからの東京を語る上で重要な期間になるはずです。

協会ではこれからも都市のあるべき姿とそれを実現する仕組みについて検討を進め、実践していきたいと考えています。今後とも全国まちづくり会議をよろしく願います。



# 全国 まちづくり 会議 2015 in 東京

10月3日(土) 4日(日)

東京大学生産技術研究所

## ◆イベント概要

2015年10月3日・4日に開催した「全国まちづくり会議2015 in 東京」は、テーマを『都市の未来を考える』として、これまでの考え方にとらわれない新しい都市の未来像を模索することを目的に開催されました。

一日目は「イノベーションとまちづくり」と題して野城智也先生に基調講演をしていただき、その後パネルディスカッションを行いました。また、楠本洋二賞記念フォーラムやレジェンドトーク、ポスター展示会場での車座交流会等が開催されました。

二日目は、日本都市計画家協会賞のプレゼンや日韓まちづくりセンターフォーラム、地方創生や復興支援のディスカッション等とともに東北カフェ&マルシェも開催されました。閉会式では、大会の総括が行われた後に、次回の全国まちづくり会議が高岡市で開催されることが発表されました。

## ◆パネル展示出展団体

### 〈一般参加団体出展〉

- 深沢・桜新町さくらフォーラム
- 一般財団法人 都市農地活用支援センター
- 特定非営利活動法人 グリーンネックレス
- 政治都市政策研究会
- 特定非営利活動法人 横浜にLRTを走らせる会
- 一般社団法人 都市防災不燃化協会
- 小田原laboratory
- 日本都市計画家協会ルーフスケープ事業 日本屋根外装工事協会
- 恵み野商店会
- 淡路瓦工業組合
- 豊間区・ふるさと豊間復興協議会
- 市民まちづくり支援・都市ネットワーク会議
- 一般財団法人 世田谷トラストまちづくり
- 公益財団法人 名古屋まちづくり公社名古屋都市センター
- 公益財団法人 練馬区環境まちづくり公社練馬まちづくりセンター
- 玉浦西まちづくり検討委員会・玉浦西まちづくり住民協議会
- 熊本まちなみトラスト
- 韓国まちづくり全国ネットワーク
- 江陵市まちづくり支援センター
- 人生演劇 Life Is Drama
- 京畿道タボク共同体支援センター
- NPO ア！安全・快適街づくり
- 東京都都市づくり公社
- いたばし総合ボランティアセンター
- 新井信幸研究室+あすと長町復興支援ボード
- 東京文化資源区ハーバード大学ワークショップ
- JSURP 美しいまちづくり研究会
- 共育：フラワーアップスクール

### 〈企業出展〉

- 株式会社 総合資格
- 高浜市商工会
- 株式会社 安井建築設計事務所
- 株式会社 リコー

## ◆主催、共催、後援

【主催】認定特定非営利活動法人 日本都市計画家協会

【共催】公益財団法人 東京都都市づくり公社  
東京大学生産技術研究所

【後援】一般社団法人 日本建築学会  
公益社団法人 日本都市計画学会  
東京文化資源会議

## ◆協賛

- 京成バス株式会社
- 京浜急行電鉄株式会社
- 株式会社 建設技術研究所
- 株式会社 総合資格、
- 株式会社 竹中工務店
- 東京急行電鉄株式会社
- 株式会社 日建設計
- 株式会社 日本設計
- パシフィックコンサルタンツ株式会社
- 三井不動産株式会社
- 三菱地所株式会社
- 株式会社 安井建築設計事務所
- 株式会社 リコー

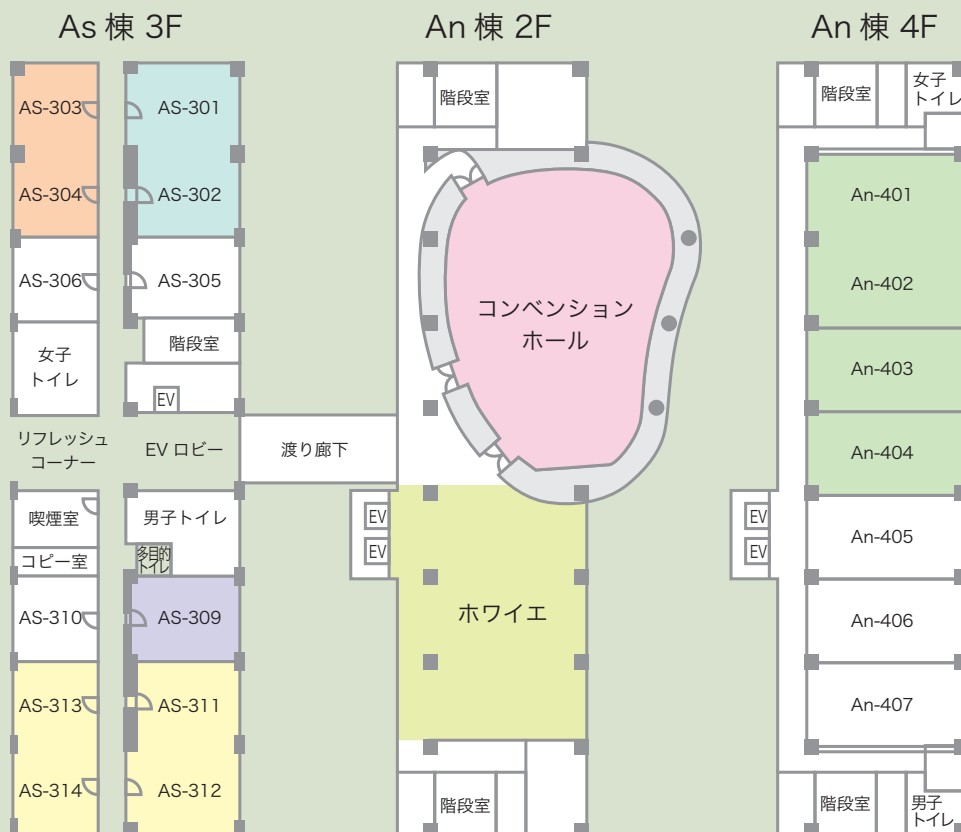


タイムテーブル

10/3 (土)	An棟2F		As棟3F				An棟4F			S棟		
	コンベンション ホール	ホワイエ	As301 As302	As303 As304	As309	As311 As313	As312 As314	An401 An402	An403		An404	
12:30	開会式											
13:00 30	「都市の未来を考える」 基調講演				シネマ ディック・ アーキ テクチャ 東京	パネル展示						
14:00 30	「都市の未来を考える」 パネルディス カッション											
15:00 30												
16:00 30			楠本洋二賞 記念 フォーラム	JSURP レジェンド トークVol.1			全国の美しい まちづくり 実践から 地方創生へ	ejob事業の 普及と発展 に向けて	(ものまち研) 川からみる 産業立地			
17:00 30												
18:00 30												
19:00 30											交流会	
19:30												

10/4 (日)	An棟2F		As棟3F				An棟4F			S棟		
	コンベンション ホール	ホワイエ	As301 As302	As303 As304	As309	As311 As313	As312 As314	An401 An402	An403		An404	
9:30					シネマ ディック・ アーキ テクチャ 東京	パネル展示						
10:00 30	日韓 まちづくり センター フォーラム	東北カフェ &マルシェ	日本都市計 画家協会賞 受賞団体 プレゼン テーション						美しい まちづくり パートII 花の おもてなし 会議			
11:00 30		ランチタイム セッション										
12:00 30												
13:00 30	現地からみる 地方創生の これから	東北カフェ &マルシェ		東京文化 資源会議 学生 セッション						「輪中会議」 番外編		
14:00 30												
15:00 30			JSURP 復興支援 タスク フォース									
16:00 30												
17:00												
17:30	表彰式・閉会式											

会場案内図



シンポジウム

「都市の未来を考える」

1. 基調講演

「イノベーションとまちづくり」

野城先生（東大副学長）

野城先生の基調講演は、まず、まちづくりとイノベーションの類似性から始まった。イノベーションには、コミュニティが大切で、まちづくりと密接に結びついている。また、関わる人間が主役で、どこからでも起きる可能性を持っているという。

なぜ、コーネル大学、インペリアルカレッジロンドン、ウェストケンブリッジ地区など世界有数の大学は都市部に大規模なキャンパスを建設するのか。それは、大学が、イノベーションの中核機関を担っているから。

しかし、イノベーションへの不幸な誤解がある。新しいことをすることがイノベーションであるが、科学技術はそのきっかけの一つに過ぎない。常にイノベーションの必要条件が科学技術ではない。

動産担保の仕組みや制度イノベーションなど、イノベーションの分野は多彩である。例えば、技術があっても資金がないケースの例として、動産担保の仕組みとして木材トレーサビリティシステムがある。また、制度イノベーションの例として、韓国電子政府やイギリスにおける就労履歴システムの取組がある。

イノベーションとは、既存の拘束を解く新たな取り組みで、社会的変革を生み出すことであるという。

「豊益潤福」の実現として、豊かさや利益だけでなく、うるおいや幸せが必要。リニアではなく複線循環型のプロセスとコミュニティ、分担協議型の進め方が求められる。しかし、出発点はケースバイケースで、機能創造や意味創造のバランスが重要。価値創成網で、周辺を巻き込んでいく。イノベーション・コミュニティは横串であり、地域に張り付いた知の発見。多様性を持った都市に可能性があるかとまとめられた。

これまで、科学技術がイノベーションの必要条件と認識していた自分としては、「イノベーションとはそういうことか」と、まさに新たな発見があった。



2. パネルディスカッション

後半のパネルディスカッションは、コーディネーターの高鍋さんの進行のもと、基調講演された野城先生のほか、千葉県桜川市で地方創生に取り組んでおられる博報堂の深谷さん、東大生産研の加藤先生、JSURPの小林会長がパネラーとなり、活発な議論が交わされた。

①イノベーションとまちづくり

まず、博報堂スマート×都市デザイン研究室長の深谷氏からは自身の取り組みについて紹介。地方創生関連で茨城県の桜川市に入っている。また、まちのブランディングにかかる仕事をしている。「人と動く」をデザインするとまちを変えられる。消費者ではなく生活者と定義し、人々の生活のシーンの中にサービスを提供していきたい。まちらしさをどうやって築いていくか。身の丈サステナブルの物差しを重視し、ほかではマネできない魅力やその地域にしかない根づいた情報を如何に吸い上げられるかが重要。そのため、桜川市の取り組みでは、すべてのステークホルダーにヒアリングしているという。

続いて、加藤先生からは、過去の慣例にとらわれず、根本から考えなおすこと、生産者の常識の厚みを活かすことが重要と発言。以前は、風船型縦割りだったが、今はボトルネック型縦割り。必要最低限のことができず、隙間がたくさんできてしまう。システムをどう変えていくかが大きなテーマ。また、長期的展望が逆に慣性を強くしているとも発言。構想力が社会からなくなり、俯瞰する力が社会システムから欠落。無理なスタンダードが存在しているという。レジリエンス（強靱化）とは、野球に例えると、速球派がケガして復帰する際、取り入れる選択の幅があるかないか。強靱性、感受性、回復力、変われる力。地方創生の議論では、元に戻ることにこだわりすぎていて変われる世界が極めて狭い。回復力をどう平時からつけるか、変われる力をどう身につけるかがイノベーションと発言された。

小林会長からは、ボゴダの都市再生を例に、「社会包摂的都市再生」について中南米での取り組みと、日本での適用の可能性について発言された。都市再生が実施される以前のコロンビアは、社会問題が山積し日本



認定NPO日本都市計画家協会理事  
株式会社アルテップ

中川 智之

の戦後のような状態だったという。しかし、人権・政策等とのパッケージ型の都市再生を実行した。その結果、今のコロンビアの首都はパーフェクトに安全。まちに人が集まり始めるという。イノベーションには、マクロ経済的な都市の経営計画、低所得者の救済も大きなアイテムで、社会問題を重層・包摂的に考えていくことが必要。日本でも、社会包摂都市づくりのリーダーがイノベーターリーダーとして期待されるが、果たして実践できるかどうかと締められた。



## ②イノベーションとは何か・可能か?

続いて、高鍋さんから、都市の課題を考えながら現場でなにがイノベーションできるのかについて投げかけられた。

深谷さんからは、きっかけを見出すのは難しくない。イノベーションはユニークな組み合わせ。組み合わせ方の妙が重要。享受するのは人しかいない。高度な人間力としての組織知、高度なマーケティングスキルなどの手法知、超多様な専門性の分野・統合知など、社会に置き換えると自治、経済、文化の団子の串。大きな方向性を共有化できるかどうか、会社を超えて目指せるか否かが大事と発言された。

また、加藤先生からは、イノベーションの先に出てくるものはわからない。生む環境を如何に作れるのか。多様性が必要と発言された。

小林会長からは、日本においても可能性はあるが、オフィスでやってはだめ。まちかどのカフェなど知識交流する場が大事。出会いの仕掛け・プレースが必要。

オープンカフェの椅子の数と文化度はイコールで、感性・情を生むことが大事と発言された。

野城先生からは、行先わからないがベースのコミュニティは、イノベーションするときにも有利。やっかいな問題をロジカルには解けない。社会実験、実験的取組が必要。自然発生的な仕掛けが必要と発言された。

## ③どんなビジョンを描くのか?

各パネラーから、ビジョンの描き方について下記のような発言があった。

- 定型、慣性から外れる。前の時代を引きずらない。
- 住民参加から都市計画の専門家まで、全部が大事。色んなフェーズがある。
- 虐げられている高齢層をどう取り上げられるか。弱者を切口にするとリアリティがある。
- ものことが複雑であればあるほど、ビジョンが大事。言われて作るのは難しい。ダイバーシティ、マイノリティ、色んな人を尊重していくべき。

また、会場との意見交換では、超高齢社会の中のライフスタイルとして、生産年齢層に照準を当てるのではなく、すべての人が地域社会で活動できる仕組みの必要性やマイノリティ視点から、異分子、多様なプレーヤーが重要性について発言があった。

最後に、パネラーから、イノベーションが生まれそうな環境を如何に作るのか、人を動かすチカラをどう地域に伝え巻きこむのか、民の資金をどう活用するのかなど、イノベーションの実践に向けた課題提起で会を締めくくられた。





## 楠本洋二賞記念フォーラム

出演者 : 加藤 孝明 (第1回優秀賞)  
 椎原 晶子 (第3回最優秀賞)  
 小林 真幸 (第4回最優秀賞)  
 石神 孝裕 (第4回奨励賞)  
 原 拓也 (第5回最優秀賞)  
 樋口 秀 (第5回優秀賞)  
 長谷川隆三 (第6回最優秀賞)  
 中島 敏博 (第6回奨励賞)  
 コーディネーター : 石川 岳男

楠本洋二賞は、全国の都市計画・まちづくりにおいて活動する若い研究者やプランナー、まちづくりの実践者を顕彰し、さらなる活躍を期して支援することを目的として2009年より行われていましたが、応募者の減少などもあり、昨年度の第6回で一旦終了することとしました。協会としては、これまで受賞された計18名の方を対象としてフォローアップを行うこととしており、今回の記念フォーラムはその第1回目として位置づけています。

過去の受賞者の方にお声掛けをしたところ、今回は8名の方にご参加いただくことができました。フォーラムでは、楠本洋二賞のテーマである「理論」と「実践」のうち、「理論」に焦点を当て、細分化・専門化しつつある都市計画の分野のあり方と、都市計画が元来有すべき総合性の両立を図るためのこれからの「理論」体系を大きなテーマとして議論を行いました。

最初に、各受賞者が考える「理論」について簡単に発表していただきました。

**加藤**：「理論」を支える技術は体系化できると思う。小さな仮説を、育み、修正しながら、大きな仮説を実証する。単品生産での過程で生産される「経験」の蓄積と共有、これが個別の理論にフィードバックされることが重要。その点では記録が残っていないこと、共有の仕組みがないことが問題。

**椎原**：実際のモデルをつくりながら、法制度等を動かす、点から面へのまちづくりをしている。「まちと暮らし、建物を住み継ぎ、活かす仕組み」を重視している。具体的には、防災、防犯などの仕組み、民間ベースで

出来る仕組みづくりを検討・共有していきたい。

**小林**：土地利用制度を考えるにあたっての場所性・歴史性を尊重すべきで、全国画一的な制度である必然性はない。人口減少など大きなパラダイムにどう対応していくかについては、土地利用としても共通見解があっても良いのではないか。何をもち「妥当な判断」とするかの仕組み、住民参加での考え方などについては、共有すべきものだと考えるし、継続的なモニタリングも必要であろう。

**石神**：「個別分野を大枠で同時に規定する事前調整方式、都市施設の計画に導入」が受賞時の理論だった。「理論」はプランニングの拠り所。「理論」を拠り所に出来るのであれば、法制度はあくまでもツールの一つとなり、プランナーの財産となるのではないか。人が判断、プランニングするための理論、環境、社会、防災等全体をマネジメントできる理論、余裕を持たせたプランニングが重要ではないか。

**原**：「地権者が公的空間や公的機関に関われるまちづくり会社に携わりたい」というのが起点だった。年間会費、行政からの委託、賃料連動の収入の3つを収入として活動を行っている。その結果、西口商店街よりも、活動を実施している東口ロータリーの方が路線価の低下レベルが低い。このような取組みを地区外の人々にどのように納得させていくか、普及させていくかは、これから理論化したい。

**樋口**：「理論のあり方」については、万能薬はないが、中心市街地をなんとかしたいというのは共通認識となっている。戸建住宅は高齢者世帯が多数となっており駐車場がなく、地価・税金が高い。若い人にとっては面白くないまちになっている。規制+土地政策(所有)+税制を組み合わせる必要がある。また、交通、自動車を受け入れる理論も考えている。

**長谷川**：フローで見えていかないとエネルギー問題は解けない。都市計画に、時間(動き)視点を組み入れた手法として「マネジメント」を重視している。都市の中にエコシステム、イノベーションを活かしていくためにはマネジメントの手法が重要だと考えるし、理論化していきたい。20年後をスライスでみるのではなく

全国まちづくり会議実行委員会委員長 石川 岳男  
認定NPO日本都市計画家協会副会長

く、フローで考えていきたい。

**中島**：まちづくりの拠点施設の運営をしていた。公園・緑地をどう評価するか、何をもって成功とするか。点（個人）、線（グループ）、面（団体）、体（自治体全体）という視点でまちづくりの骨格が出来ないか、理論化できないかと考えていた。



受賞者からの発表ののち、会場も含めて自由に意見交換を行いました。

**石川**：科学としての都市計画には再現性が求められるが、どのレベルまでの再現性が求められるのか。また、都市計画は、文化を求める面、文明を求める面等があり、一般解が出しにくい。リーチの長い話と個別具体的話をどう結びつけるか。

**加藤**：都市計画の草創期は「個人の思考から一般化というプロセス」があったが、段々とそれがルーティン化した。もう一度根本から考え直すことが楠本賞で言う「理論」ではないか。

**石神**：昔は同じ方向を向きやすかった。価値観が多様化している中で一定の方向を向くための技術も必要なのではないか。

**原**：経験を話す多くの人頼っている。しかし、共通化すると陳腐化する。例えば「共通項目」はあるが、共有する仕組み、検証する仕組みがない。

**小林**：検証することは重要である。ただ単に申請を受け付けるだけでなくモニタリングも含めた仕組みが必要。

**椎原**：歴史的建物の保存に関して、都市計画側から応援する理論が見えてこない。限られたエリアにおける理論になりがち。建築基準法に関わらない要素、工

夫、経験知を共有していくことが求められる。

**樋口**：建物を持っている人は空家でも困ったりしない。その中でみなぎWINになる仕組みをどうするか。たとえば経済価値は、これから上へと上がることが期待し得ない中で、どう皆に納得してもらおうスキームを作っていくのか。

**中島**：評価システムが不在。量の充足を考えてきて、質を考えてこなかった。利便性だけしか評価軸がない。街についての説明書がない。説明すると、理解、協力してくれる人も出てくる。

**長谷川**：楠本は都市計画のツールというものを信じていた。色んな都市の課題を都市計画でどう解いていくか？

**加藤**：都市計画は職人芸ではないはずだが、現在は職人芸に近い。そこから脱しようとするのが「理論化」につながるのではないか。現象を単純化し、根幹を説明するものが「理論」と言えるが、切り捨てられていく部分に大切なものがある。複雑なものを複雑なまま受け止めていく理論があっても良い。

**角田**：建築はフランスでは文化芸術、日本では土木。理論だけで解こうとすれば困難ではないか。

**黒川**：都市に関わる人に「ない」もの、①地籍測量がない、②借地借家法のせいで建物評価が未熟、③市民がない。欧州の場合、市民は義務を持つ。

紙面の関係で全ては記載できませんが、全てを記載してお読みいただいても、おそらくまとまりのない議論と思われてしまうかもしれません。たぶん、それはテーマとした都市計画の「理論」が不安定な位置に置かれていて、多くの人その位置に不安と疑念を抱いているからかもしれません。あるいは、元々答えの無い問いであったかもしれません。その一方、終盤では会場全体が一種の知的興奮状態にあったことも確かであり、「理論」に関する議論を巡って出演者と聴衆それぞれが新しい発見をしたのかもしれない。

できればこの熱気を活かし、今後も楠本洋二賞受賞者とともに、都市計画の「理論」と「実践」について議論を深めていきたいと考えています。

JSURP レジェンドトーク Vol.1

都市計画と事業 1970-2000

オイコス計画研究所代表 笹原 克

パネリスト 鈴木崇英(日本ERI株式会社 名誉会長)  
 小澤一郎(公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター 理事長)  
 光多長温(公益財団法人都市化公室 理事長  
 認定NPO日本都市計画家協会 名誉会員)  
 コメンテータ 大沢昌玄(日本大学准教授)  
 モデレータ 打林國雄(日本都市計画家協会 常務理事)  
 笹原 克(オイコス計画研究所 代表)  
 司会 渡会清治(日本都市計画家協会 副会長)

レジェンドトークのねらい

都市計画家協会が生まれて20年余りの時間が過ぎ、この間都市計画を取り巻く環境も大きく変わり、今後どのような形で都市計画がなされ、都市計画家の役割がどのようになるのかなどは、特に、若い世代の都市計画や街づくりにかかわる皆さんにとって大きな関心事ごとであります。これからの都市計画を考えていくにあたり、1970年から2000年までの時代に実践で都市と取り組んできた本協会の会員から直接その経験知を受け取り、それを次の世代に繋いでいくことができるのは、本協会の大きな役割でもあります。

この時代を振り返ると、1945年の敗戦をむかえ国土は焦土と化し、すべてを新しくつくる時代から高度経済成長を経験しながらオイルショックをむかえる1973年まで続きました。その後、わが国は省エネ技術の先行により世界に先駆け安定経済成長をつづけましたが、80年代にバブル景気を生み、90年初頭にバブルがはじけ、その後デフレ経済の20年を今も続けています。このような激動ともいえる時代「1970-2000」に、民間プランナー、行政、金融機関のそれぞれの立場で、都市と関って活動してきた3名の方に、この激動の時代の「都市の計画と事業」について語って頂きます。

鈴木崇英氏のトーク「都市デザインの実践」

「都市計画」「都市デザイン」を通じて一貫して「美しい、快適な空間・街・社会をつくること」を常に目指してきました。都市計画の仕事は、大きく3つに分けることが出来ると考えております。第1は都市・地域ビジョン、法定都市計画、第2は市街地開発、第3は街づくりです。

私(鈴木)は、主に第2の市街地(再)開発における都市デザインに関ってきています。具体的な事業としては、リバーシティ21、大森バルポート、幕張メッセ、幕張ベイタウン、川崎ソリッドスクエア、アクトシティー浜松、神戸六甲アイランド、福岡シーサイドももちなどです。これらの事業を進めるにあたって、土地の分析、地権者の希望、採算性、事業化の可能

性、地域住民の意向、適用できる法制度などを勘案しながら、用途、規模、形態、群建築の配置、ランドスケープデザイン、交通施設計画などを検討して、全体の主張・統合性を表現してきました。

これらの経験から「何を大切にしてきたか」というと、「日本を知る」、「時代を知る」、「地域を知る」、「世界の先端を知る」、「民意を統合する方法を知る」、「金を知る」ことでした。これらのことを常に考えながら、一つ一つの事業を行ってきました。これまでの経験をふまえて、若い方々に参考となるようなポイントは、次のようなことかと思えます。

- 実践、実現することが大切
- 自分たちのやりたいテーマを見つけ、面白くして、提案する
- 自分たちの独自性が大切で、他でモデルとなるものとする
- 誰もが得をするように配慮する
- 日本人の美意識を空間計画に取り入れる
- 制度が必要なら創る(創ってもらう)
- 交渉、戦略、プレゼンテーションは特に力を入れる

現在、私(鈴木)はCOPER研究所を立ち上げ、芸術や文化を社会に浸透・定着することを目指して、これまでの工学の枠を越えてさらに職域を拡げることを行なっていくつもりです。

小澤一郎氏のトーク「都市計画と都市計画家の役割」

鈴木さんの都市計画の仕事の区分からいうと、私(小澤)は第1の「官制都市計画」に関ってきました。一言で言うと「行政施策の地域展開のための場づくり」と言えます。都市計画を石川栄耀は「社会への愛」と言い、エベネザー・ハワードは「平和への道」と言いました。都市計画は、「現代及び将来の社会的課題の解決に向け、空間づくりを通して貢献すること」であると思っています。

これまで関わってきた計画や事業を整理すると以下のようになります。「住宅・宅地対策」ではニュータウン開発、「交通対策」では総合都市交通体系(物流を含む)の調査や計画手法の開発、「先端産業・地域開発」ではテクノポリスによる都市基盤整備と面的整備、「高度情報社会の実現」では都市再生インテリジェントシティ機能の導入、「臨海部再生」ではみなとみらい、東京臨海副都心、京葉臨海部再生、神戸ハーバーランド、「鉄道敷地再生」では汐留、埼玉新都市、大阪梅田、「地方都市中心市街地再生」では中心市街地活性化法、地





方創生などです。

これら都市計画の実践を通じて思うことは、市街地を「原始市街地」から「1次市街地」へ、さらに「2次市街地」へと進歩発展していく姿です。原始市街地は、戦後の興廃状況で都市基盤がないままに建物が建ち始める状態です。そこで、道路・公園・下水道などの都市基盤を整備していく状況の都市が第1次市街地といえます。さらに都市基盤が整備されたうえに、生活・安全等の観点から公的施設の適正配置がなされて街区が形成されるのが第2次市街地です。まさに、われわれの世代が関わってきたのは、この原始市街地から第2次市街地の形成であったといえます。

では、次の時代に取り組むべき都市計画とは何か。今の話をつなぐとすれば、「次世代市街地」を形成することとなりますが、次世代の最大の課題は、「環境・エネルギー問題への対応」となるでしょう。また、社会的課題が多様化することによって、計画がこれまでのようなどこでも通用するモデルづくりからは難しい時代となります。地域毎に夫々の課題が多様化し、その対応も多様化するからです。そこで、都市計画家が果たすべき役割が大きくなります。コミュニティの場から、国土・地域計画の場にまで広く、実践的な幅広い人材が求められてくると思っております。

#### 光多長温氏のトーク「都市開発金融」

私は、先のお二人と異なり銀行マンでした。政策金融機関に属して都市へ投資を行ってきました。開発金融についてはプロジェクトファイナンスともいいますが、都市開発事業に関するプロジェクトファイナンスを都市開発金融と呼んでいます。これまで都市開発金融の面から事業をストップすることも多くありました。つまり、開発金融は、事業の目的、事業のやり方(事業方式)、事業主体、ファイナンススキーム等を社会的視点、事業採算性の視点、経済波及効果の視点からその事業が適正かどうかを判断します。実際には3割くらいは、開発金融が成り立たないとして事業を止めたと思います。特に、リゾート開発の案件は、随分と中止したと思います。

1970年から2000年までをみると、大きく分けると70年代は「新全総」にみられるように全国的にインフラ開発が盛んで、新幹線整備、テクノポリス、市街地再開発の事業が中心で、事業方式も法定開発事業が中心でした。80年代に入ると、東京一極集中が問題となり一方で米国との貿易が大きな問題となり内需拡大を

要請され、国鉄民営化と国鉄清算事業団用地処分、民間活力の導入、多極分散(業務核都市)などの事業が展開され、事業方式も信託方式、新借地方式、TDR、民間公共会社方式などが生まれました。90年代は、バブル経済が崩壊していくものの事業が不良債券化してその処理に追いまかれる時代となりました。事業方式も、PFI、REIT、信託型再開発など多様化してきました。

現在に至るも、90年代からの構造変化は続いており、「失われた20年」が継続しています。その変化の中の特徴は、一言で「多様化」といえます。そこに新しい都市開発、開発金融、事業方式の方向が見えてきます。一つは、「事業主体の多様化」です。事業に最適な事業主体は何かを多様に適用できるようになるでしょう。二つ目は、「事業方式の多様化」です。特に海外での制度が取り入れられるようになるでしょう。三つ目は「金融方式の多様化」です。わが国のファイナンスは欧米に較べて遅れており、ノン・リコース、エクイティ方式などにより高度化すると思えます。

#### 大沢コメンテーターよりの指摘

土木史が、専門である自分にとっても、都市計画の各分野での報告を拝聴して、大変興味深かった。道路法は、制定100周年(2019年)を迎えるが、都市計画もレジエントの方々の実績から、未来へ向けた展望が見出せると有難い。

例えば、旧国鉄跡地開発の歴史的意味合いから今後への方向性が見えて来るか? また、都市計画行政の時代的变化等、都市計画専門家の果たすべき役割、また日本都市計画家協会の今後に関し、コメントを頂きたい。

#### パネリストからの指摘

- (1) 行政の縦割りの弊害、人事異動(2~3年)で専門家が、育ちにくい。
- (2) 行政と事業推進者、住民との推進体制の組み方、調整役の必要性。
- (3) 都市計画(課)は、役割を如何に今後見つけられるか? 環境、福祉他との連携が、必要になってくる。

#### レジエントとの今後の展開について

- (1) レジエントからの実績を、しっかり受け止める。
- (2) 21世紀の有るべき方向性を、模索していく。
- (3) その為には、レジエントと共に、検討、研究していく機会を確保して行く。

以上で、本日の会合は終了したが、今後も更に日本都市計画家協会内で、次のステップへ向けて進めることが、肝要である。

## 第11回日本都市計画家協会賞

第11回日本都市計画家協会賞は、北海道から九州まで合計13件の応募がありました。応募団体の内訳としては、北海道地区4団体、東北地区4団体、関西地区2団体、中部地区1団体、中国地区1団体、九州地区1団体にご応募をいただきました。どの応募団体も地域の人々が中心になり、現代社会における地域ごとの課題をコミュニティの形成や様々な主体が連携することにより解決・改善する取組や、地域の特色を活かしながら人と人をつなぐ地域密着型の活動など、これからのまちづくりの参考になる取組を実践している団体です。

これらの取り組みについて、各支部での選考と本部の理事・各支部長で組織する選考委員会での選考を行い、優秀まちづくり賞4団体、全国まちづくり会議特別賞1団体、北海道支部賞1団体、福岡支部賞1団体が選考されました。

各賞については次の通りです。

### ■優秀まちづくり賞

- 〇「鹿野の風」プロジェクト（山口県周南市）
- 〇六原まちづくり委員会（京都府京都市）
- 〇玉浦西地区まちづくり検討委員会・玉浦西まちづくり住民協議会（宮城県岩沼市）
- 〇新井信幸研究室+あすと長町復興支援ボード（宮城県仙台市）

### ■全国まちづくり会議特別賞

- 〇豊間区・ふるさと豊間復興協議会（福島県いわき市）

### ■北海道支部賞

- 〇NPO法人コミュニティワーク研究実践センター（北海道月形町）

### ■福岡支部賞

- 〇樋井川流域治水市民会議～みんなの雨庭づくり隊（福岡県福岡市）

全国まちづくり会議in東京の2日目に実施されたプレゼンテーションでは、一般参加者も含め約40名があつまり、各受賞団体の発表を聞きました。

### 雑木を植え続け、地域まるごとブランド化を目指す

「鹿野の風」プロジェクト（山口県周南市）

里山にオープンしたcaféなどの店主が中心になり、新たな魅力を創出し交流を活性化させる草の根活動を展開。小さな地域の宝物を見つけ育む活動を続けており、人口減少に悩む中山間地域のモデルとなるような取組です。

### 「住んでいてよかったまち、これからも住みつけたいまち」

京都市東山区六原学区における住民主導の空き家対策と防災まちづくり

六原まちづくり委員会（京都府京都市）

「空き家問題」を防災まちづくりの観点でとらえ、空き家の予防や危険の啓発、相談窓口の開設をする一方で路地入口の家屋の耐震化、防災マップづくりなどを行い、家屋という“点”ではなく面的に地域を守る取組です。

### 玉浦西～想いは未来へ～

玉浦西地区まちづくり検討委員会・玉浦西まちづくり住民協議会（宮城県岩沼市）

被災6地区の集団移転に向け、コミュニティの維持と新しいコミュニティの形成をスムーズにするため、数回にわたる住民懇談会や個別面談調査を実施し、オーダーメイドの計画づくりを行いました。移転後に組織された住民協議会の次のまちづくりにも期待が寄せられます。

### 仮設住宅からの復興コミュニティ・デザイン

新井信幸研究室+あすと長町復興支援ボード（宮城県仙台市）

多地区住民が集まる仮設住宅で希薄になったコミュニティの形成支援を行い、共助型まちづくりの体制構

認定NPO日本都市計画家協会理事 山重 明

築を行いました。これからの高齢化・独居化に対応したコミュニティ構築の展開プロセスを実践している取組です。

**震災復興に向けた、600戸のコミュニティと産業の再生；合意形成と協働の仕組み（システム）の構築によるまちづくりー若い世代、子供が戻れる街を創るー**  
豊間区・ふるさと豊間復興協議会（福島県いわき市）

被災して失われたコミュニティと産業の再生を目標に、早い時期から専門家派遣を受け入れ住民主体の復興計画の策定に着手。ワークショップを重ね、住民の意見共有と交流を図ることで具体的な活動を着実に進めています。

**第二のふるさとをつくるー課題のある若者と課題のある田舎の新しい暮らし・働き方ー**

NPO法人コミュニティワーク研究実践センター（北海道月形町）

現代社会で課題を抱えた若者と、活力不足という課題を抱える地域とを結び付け、新しい視点からの地域再生に取り組んでいます。地域で居場所をみつけ、まちづくりの担い手として期待される人材も育ち始めています。

**水と緑の回廊を軸とした安寧の流域デザインー都市流域を、みんなが集う、雨庭にしよう！ー**

樋井川流域治水市民会議ーみんなの雨庭づくり隊

都市型水害を契機に、市民、行政、研究機関等が連携し流域治水市民会議を設置。河川整備計画の策定を進め、水害対策に取り組みながら日常的な都市環境整備と水辺と住民との交流を行っています。



各団体のプレゼンテーション後には、参加者や協会理事からそれぞれの活動に関して質問が出され、熱心に議論する場面も見られました。

公開プレゼンテーション終了後には、参加者による投票が行われ、その結果を参考にしながら、選考委員会による日本まちづくり大賞と特別賞の選考が行われました。

今回のプレゼンテーション団体は、被災して急を要する中でのまちづくり活動や、今までとは違う切り口からの地域づくりなど、それぞれ特色のある活動を展開しており、審査には大変時間を要しましたが、次の団体を日本まちづくり大賞、審査員特別賞に決定しました。

受賞団体の皆様、おめでとうございます。

■日本まちづくり大賞

六原まちづくり委員会（京都府京都市）

■審査員特別賞

NPO法人コミュニティワーク研究実践センター（北海道月形町）



全国まちづくり会議と連動して実施するようになり3回目でしたが、今回は全国まちづくり会議開催地である東京をはじめとした関東地区からの応募がありませんでした。今後はぜひ開催地とその近隣から応募をいただき、その地域の特色あるまちづくりを全国に発信するとともに、たくさんの活動団体が集い、まちづくりの具体的手法の情報交換が密にできる場になることを願っています。



## 日韓まちづくりセンターフォーラム 中間支援組織の在り方

全国まちづくりフォーラム2015には、韓国側と日本側からそれぞれ日頃の中間支援組織の活動について発表した。日本と韓国のまちづくり支援団体、自治体、専門家、市民の方々の参加によって、日韓のまちづくりの仕組みについての情報交換と課題を各々確認し、また、日韓まちづくり交流活動の今後を展望した。以下各組織の発表の概要を説明する。また前日、ポスターセッションでも議論を行ったので、それも踏まえて活発な議論がされた。

### 1. 文甲島の住民たちの生活と祭を準備する過程/ 人生劇場/金宗炫

この活動団体は演劇集団であるが、韓国の仁川市の離島を活動エリアにして、村おこしに取り組んでいる。離島においては日本同様に、人口減少や住民の高齢化に伴い、村の活気が失われていた。この団体が、村に来てから、歴史や資源やコミュニティを発掘し、それらを資料としてまとめ、更に、空家を再生し、村の資源をもとに外から人が来島を促す祭を開催したところ、活気が戻り、村人たちと村起こしの協働の方向に向かっている。中間支援組織が現地参入することにより、地域が活性化する好例と言える。



韓国仁川市の文甲島での村起こしの祭

### 2. 小さな庭づくり/江陵市まちづくり支援センター/權玉善

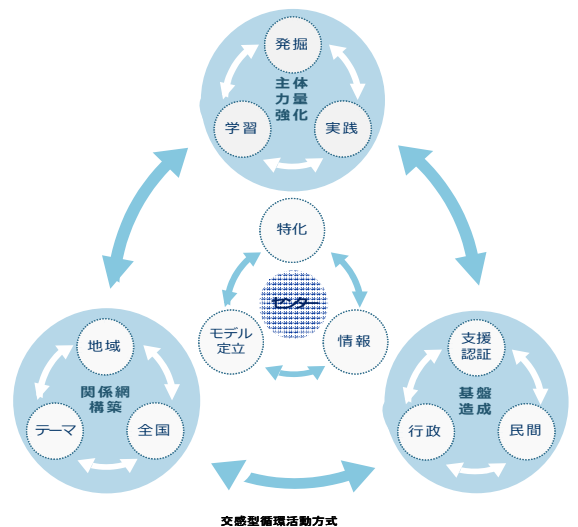
都市に住んでいる寂しい現代人を対象にして都市にガーデニングを導入し活力を吹きこむことを企画。小さな家庭菜園ボックスと空きスペースを利用して、ガーデニング方法を教育し、旧都心地活性化に成功している。小さなプランターから、多くの人が参加するようになった。



韓国江陵市の小さな家庭菜園ボックス

### 3. まちと社会的経済の融合/「京畿道タボクコミュニティサポートセンター」/李根昊

住民、行政、民間支援グループの体制と能力に応じた支援プログラムと学習コンテンツを開発して(「交感型循環活動方式」と呼んでいる)、タボクコミュニティに関する理解の向上と主体の能力の向上をはかって



交感型循環活動方式

京畿道タボクの「交感型循環活動方式」



練馬まちづくりセンター所長 小場瀬 令二

いる。最終的には、社会的経済と共同体が融合した社会的経済企業（日本でのコミュニティビジネスに近い概念と思われる）を起業化することを目指している。この中間支援組織は立ち上がったばかりであり、かなり大きな組織であるので、大変先進的で意欲的に取り組んでいる印象を受けた。

#### 4. 練馬まちづくりセンターの紹介／練馬区環境まちづくり公社／小場瀬令二

練馬まちづくりセンターでは、まちづくりの普及啓発やまちづくり活動への助成、景観整備に関する事業、等々を区民と一緒に実施している。特にまちづくり活動への助成については、助成額にたいして各団体は、人件費ベースでみると5～10倍以上の活動を行っているという報告がなされた。



練馬区の白子川源流・水辺の会の活動風景

#### 5. 千代田まちづくりサポートの特徴と助成グループの活動成果／千代田区・まちみらい千代田

色々なまちづくり活動に助成金を出している。例えば、神田倶楽部は、神田祭に参加する氏子町会所有の町御輿の写真を全て撮影し、町会の歴史、町会エリアマップをあわせて、『明神さまの氏子とお神輿』にまとめ商業出版する活動に至っている。「子どもと一緒にデザインしよう会」では、子どもの笑顔いっぱいのまちをつくるために「居場所のデザイン・共同体のデザイン・心のデザイン」をキャッチフレーズに活動をしている。現在ではトラックに遊び道具を一式積み込み「移動式子ども基地」として活用している。



千代田区の「子どもと一緒にデザインしよう会」

#### 6. 足立区西新井大師地区におけるまちづくりの取り組み事例／西新井大師周辺地区 まちづくり協議会／田口行彦・八楸一生（足立区役所）

西新井大師地区では、回遊マップの作成、街並みガイドライン案の策定の検討、景観まちづくりの実践・啓発活動をまちづくり協議会が取り組んでいる。それに対して足立区では「あだちまちづくりトラスト」助成支援を行っている。



足立区の西新井大師での行燈展示

#### 7. 日韓交流フォーラムでの議論

各プレゼンテーションの後、小泉秀樹先生をファシリテータとして、今後の中間支援組織としての「まちづくりセンター」のなすべき役割について議論がされた。日本側のまちづくり活動助成については、今後、韓国側でも取り入れたいという思惑があり、多くの質問や議論があった。また、韓国側の発表の中で、特に文甲島の事例については、芸術家がまちづくりに関わることで、大きなパワーを生み出したということで、非常に興味深いものがあった。



地方創生フォーラム

現地からみる地方創生のこれから

(出席者:敬称略)

- 梅村 仁 文教大学教授
- 山下賢一 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局
- 近藤信行 新潟県長岡市市長政策室室長
- 藤井久雄 富山県高岡市都市創造部部長
- 松木正一郎 静岡県伊豆市市長政策監兼建設部理事
- 西澤 明 日本都市計画家協会理事  
[コーディネーター]

全国の各地域では、地方人口ビジョン・地方版総合戦略の策定が進められ、地方創生の議論と取組が活発に進められています。地域人口の減少に対しては、出生率の回復や大都市圏への人口流入の動向がカギを握っています。その中で、中山間地域でも人口流入が見られる地域が出てきているなど新たな状況の変化も見えはじめています。一方、地方創生では人口定着のための「しごと」の創造には力点が置かれていますが、人口減少を見越したまちづくりの取組との連携は目立ってはいません。

このセッションでは、地方創生の施策を担当する内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局の山下さんから、国の地方創生に対する考え方や施策を紹介していただき、3市の方から自治体での取り組み状況と、今後の地方創生に必要なことについてお話を伺いました。また、自治体の地方創生の委員会にも参加されている梅村教授からコメントをいただきました。

まず、山下さんからは、6月に閣議決定された「まち・ひと・しごと創生基本方針2015」、地方創生の施策の中でまちづくりに関するものとして、都市のコンパクト化とネットワーク形成、小さな拠点の形成(集落生活圏)の施策、地方創生の深化のための新型交付金が紹介されました。

長岡市からは、「長岡リジュベネーション～長岡若返り戦略～」、産学官金からなる「ながおか・若者・しごと機構」の取り組み、総合特区制度による中山間地域でのNPO法人によるバス事業などの自立的な地域コミュニティ創造の取り組みが紹介されました。

**長岡リジュベネーション～長岡若返り戦略～**

■ 理念  
**“志を未来に活かす、ながおか”**

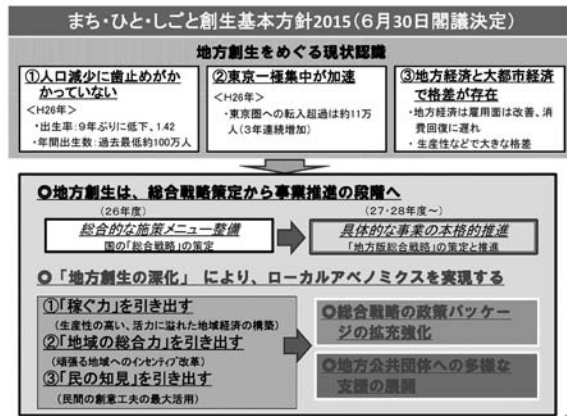
長岡市は、将来の人口減、活力減が見込まれる今日の社会状況において、その将来に実際に担っていく「若者」を地方創生の主役に据え、将来に誇って元気で若々しいまちであり続けるためにすべきことを「長岡リジュベネーション～長岡若返り戦略～」として取りまとめ、若者はもちろん経験豊かな世代も含め、全市民協働で積極的、戦略的に進めていきます。

※リジュベネーション(rejuvenation):若返り、元氣回復

■ 地方創生にあたり大切にしたいこと

- 若者自身が参加、企画、実現し、魅力を生み出すまちづくり
- 未来の長岡を担う子どもたちを育てる質の高い教育環境づくり
- 長岡で頑張っている産業の事業展開を応援するとともに、新たな起業や産業の誘致を促進することによる「働く場」の確保

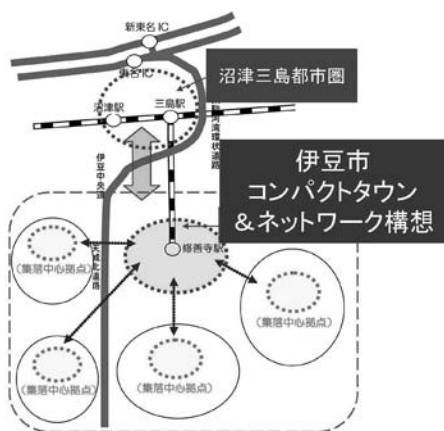
高岡市からは、2060年の目標人口を12万5千人とする同市の総合戦略の紹介と、伝統工芸産業再興1000年プロジェクトなど8つのキープロジェクトの紹介がありました。





西澤 明  
認定NPO日本都市計画家協会理事

伊豆市からは、総合戦略で配慮すべきことを徹底的に議論し、経済効率より大事なこと、お金でない本当の幸せが何かを考えたこと、近隣の三島市等の都市圏に含まれるのではなく、伊豆市だけのコンパクトシティを考えていることが紹介されました。また、地形特性や災害リスクを考えて土地利用を見直し、線引き廃止、特定用途制限、自主条例により危険な場所への対応をしようとしていることが紹介されました。



梅村教授からは、総合戦略を作ることで総合計画の再構築を図ってほしいこと、戦略の策定時間が短く作り急ぎの感があること、住産官学金労言の議論の場が形が整いすぎてディスカッションによる課題の「でこぼこ」を丸くする場となっていないこと、自治体の計画になっており地方あるいは地域の創生になっていないのではないかという指摘がありました。必要な着眼点として、地域は何をすれば良いのかを考える地域の自主性を育てること、住民の満足の高い地域では住み続けたいという思いを育てる観点があげられました。また、次世代の地域で頑張る人が地域づくりに参画できる大義名分を提供すること、ひとの連環をつくること、ひとの出番と居場所を創出することが提案されました。

続くディスカッションでの話題をいくつか紹介します。

地方創生で一番困っていることとして次のようなことがあげられました。

- ・ものづくりや教育の施策に力を入れたいが効果があるのに時間がかかる事業であり本当にうまく回っていくのかがつかめない
- ・住民側の諦め感の払拭が必要
- ・都道府県の縦割りにより部分最適が求められ全体最適が損なわれる懸念
- ・県や制度の意識改革が必要
- ・鉄道やバス網を活かしながら面的なネットワークを作りたいが交通事業者に大きな力がなくさらなる支援を考えていくことが必要
- ・コンパクト化で居住の誘導が求められているが、インセンティブでやるか規制でやるのか方向性が見えていない

また、国に期待したいこととしてはやはり交付金等による財政支援が要望されました、

- ・継続的で様々な使える交付金を期待したい、
- ・居住支援やケア支援をしているが市の施策だけでは利用者のメリットが大きくなり財政的な支援が必要
- ・地方の大胆なアイデアに対する大規模な交付金があるとありがたい

といった意見が出されました。

また、市民を巻き込んだ戦略の策定や実施、担い手の育成に向けては、

- ・プロジェクトのアクションプランの検討においては、プロジェクトを実際にやる人を巻き込んだワークショップをやってリアリティのあるプランをつくる
- ・20年、30年先に向けた戦略を考えており、若者にも今の検討段階から入ってもらい、自分たちで考えて、考えたことは進めるという考え方で進める
- ・将来のまちを担う小中学生がまちを自慢できるような教育もしていきたい

といった意見が出されました。

地方創生では多くの自治体が人口ビジョン、総合戦略を策定し、KPIで進捗状況を把握しようとしています。都市計画家協会でもこれらがどのように進んでいくのか引き続き注目していきたいと考えています。

## 東京文化資源会議学生セッション報告

### 1. 当日に向けたワークショップの概要

「TOKYO2020 -東京文化資源からのコミュニティ・デザイン-」と題された2回のワークショップなどで学生たちは8月から準備を進めてきた。本ワークショップはリーディング大学院プログラムであるソーシャルICTグローバルクリエイティブリーダー育成プログラム(GCL)と東京文化資源会議の共催で行われた。そのため、学生は東京大学・首都大学東京・千葉大学から、また専攻も都市計画を専攻している学生だけではなく、計算機科学・看護学・マネジメント・情報学・教育学などを専攻している学生も参加し、多様な視点から文化資源を発掘することが期待された。

当日までのスケジュールは以下のものであった。

#### ●第1回ワークショップ

(7/16, 於: 東京大学本郷キャンパス)

初回のワークショップでは東京文化資源区構想の概要説明のあと、全員で対象地域となる湯島・本郷地区のフィールドワークを行った。あいにくの大雨であったが、学生たちは湯島・本郷地区の特徴について、坂・寺社・看板建築・商店街などの存在を知った。フィールドワークから帰ったあと、数多くある地域の特徴の中から、各自が興味関心を持ったことを発表しあった。その上で関心が近い学生同士で3人ずつのグループにわかれ、計4班ができた。

「地形班」: 坂や道を活用した高齢者の介護予防ルートを資源とする

「飲食班」: 飲食店の種類とその歴史や立地条件などに着目する

「産業班」: 本郷の商店街の産業を多面的に見る

「生活景班」: 看板建築や合理性が失われた建物など建物の使われ方を見る

この後、第2回目のワークショップまでに班ごとに自主的に調査を行った。

#### ●第2回ワークショップ (8/20・21, 於: 3x3Labo)

第2回は2日間の日程でワークショップが行われた。ワークショップには、学生以外にも東京文化資源会議のメンバーが参加された。1日目の午前中は、趣旨説明や自己紹介の後、NPOたいとう歴史都市研究会の権

原晶子氏から谷中での活動に関するレクチャーを受けた。学生たちは、谷根千でのまちづくり活動だけではなく、資源のマッピングや将来像の描き方などについて知識を得ることができた。また、2日目の午前には、東京大学大学院情報学環の吉見俊哉教授による東京文化資源区構想についてのレクチャーを受けた。その他の時間で学生たちは作業を進めるとともに、追加のフィールドワークなども行った。

2日目の最後に各班はここまでの成果を発表し、先生方や東京文化資源会議の関係の方々からアドバイスを受けた。

### 2. 当日の発表

当日は、東京大学大学院工学系研究科の小泉秀樹教授による趣旨説明の後、学生たちの発表へと移った。

学生たちは第2回ワークショップで受けたアドバイスを参考に、さらに発表内容を練り上げ、全国まちづくり会議当日を迎えた。各班の最終的な発表内容の概要は以下のようなものとなった。

#### ●地形班

東大病院に入院しており運動が必要な糖尿病患者や、糖尿病予防をしたい人を対象とし、湯島・本郷地区の坂道を中心とした散歩コースの提案をした。特に、カロリー消費や散歩コース周辺の歴史資源とカフェなど休憩できる施設の情報も織り込むことで楽しく歩ける散歩ルートそのものを資源だと考えた。具体的なルートやその消費カロリーを提示し、その活用可能性を示した。

#### ●飲食班

本郷地区の飲食店の看板デザインに着目し、デザインに込められた思いを資源だと考えた。そこで、その思いを保存するためのアーカイブを作成することを提案した。

#### ●産業班

本郷地区にある菊坂通りにある商店街を対象にその変遷を分析した。菊坂には個人商店や事業所が多く残されている一方で、敷地統合による集合住宅に転用された場所も多くあることが明らかとなった。その中で

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻

修士課程 寺田 悠希、 助教 真鍋 陸太郎、 特任助教 後藤 智香子、 教授 小泉 秀樹

個人商店に残された「店先文化」を資源だととらえた。店先文化とは、店先での店員と買い物客との交流や店先からの地域からの見守り、店先に見える手作りの製作などのことである。

### ●生活景班

湯島天神の宮司へのインタビューなどにより湯島地区ではまちづくり活動が盛んではないことを明らかにした。その上で、いわゆるトマソンと呼ばれる現在では意味のなくなってしまう建物や構造物に着目しながら、それらの面白さを活用して学生などの若者を巻き込むことを提案した。

この他、明治大学の学生によるハーバード大学との共同プロジェクトに関する発表も行われた。



### 3.主なコメント

会場からは次のようなコメントをいただいた。まずは、歴史的資源への言及が少ないのではないか、というものがあつた。このことは世代によって文化資源と捉える対象が異なるのである、と学生は参考になったようであつた。

また、資源をよりアクティブに地域づくりに応用する発想、例えば、坂をスポーツや健康まちづくりの資源としてとらえた場合のランニングマニアへのアピールや疾病・病状におうじたコース設定等について、さらに踏み込んだ提案があれば良いと言った意見もだされた。

### 4.今後に向けて

今回のワークショップを通じて、学生たちは、従来は文化資源として見られてこなかったものも資源になり得るという提案を数多く行った。今後に向けた活動としては2つの方向性が考えられる。

まず1つ目は実際に発見した資源をあらためて地図などにプロットすることである。今回の発表では必ずしもすべての班が資源のプロットをしていなかった。しかし、実際に資源として活用していくには、資源がどこにあるのかわかりやすく示す必要がある。アーカイブを提案した班もあつたが、より具体的な方法の提案をすることも今後に向けた活動になるだろう。

そして、2つ目は発見した文化資源を東京文化資源区の他の地区にも適用できるか調査することである。例えば、商店街の店先文化は本郷・菊坂以外にも谷根千地区にも見られるだろう。トマソンについても湯島・本郷地区以外の地区では異なった様相で存在しているだろう。また、坂についても沿道環境が地区によって違うことで散歩コースとしての活用の仕方が変わってくると思われる。

これらができた上で、各班の提案した散歩コースやアーカイブなどについて、実践を行うことが最終的な目標である。実践を行う中でさらに新しく発見された文化資源が磨かれていくだろう。



# JSURP 復興支援タスクフォース フォーラム

## 1.趣旨

東日本大震災の直後、当協会では震災復興タスクフォースを組織し、様々な活動を実施してきた。

平成27年度で国等の東日本大震災の集中復興期間が終了することを踏まえ、これまでの活動を振り返り、次年度以降の復興第2ステージに向けた視点・論点等を導き出すことを目的にフォーラムを開催した。

を移した。この経緯を踏まえて意見交換を行った。



## 2.フォーラムの概要

東京大学生産技術研究所の加藤孝明准教授をモデレーターとして、被災地で活動する参加者が復興の取り組みを通じて良かった点、悪かった点について発表し、意見交換を行った。

### (2) 主な意見

#### ①情報共有

発災直後に当協会が作った専門家のメーリングリストが情報共有に有効に機能した。広範囲で被災した今回の災害のような場合、横の情報共有が重要である。

#### ②過去の復興経験を活かした制度づくり

今回の復興は土地区画整理事業や防災集団移転促進事業等を中心に進められたが、既存制度では対応しきれない面があり、平常時から既存制度の隙間を埋める復興の仕組み・制度の準備が必要である。

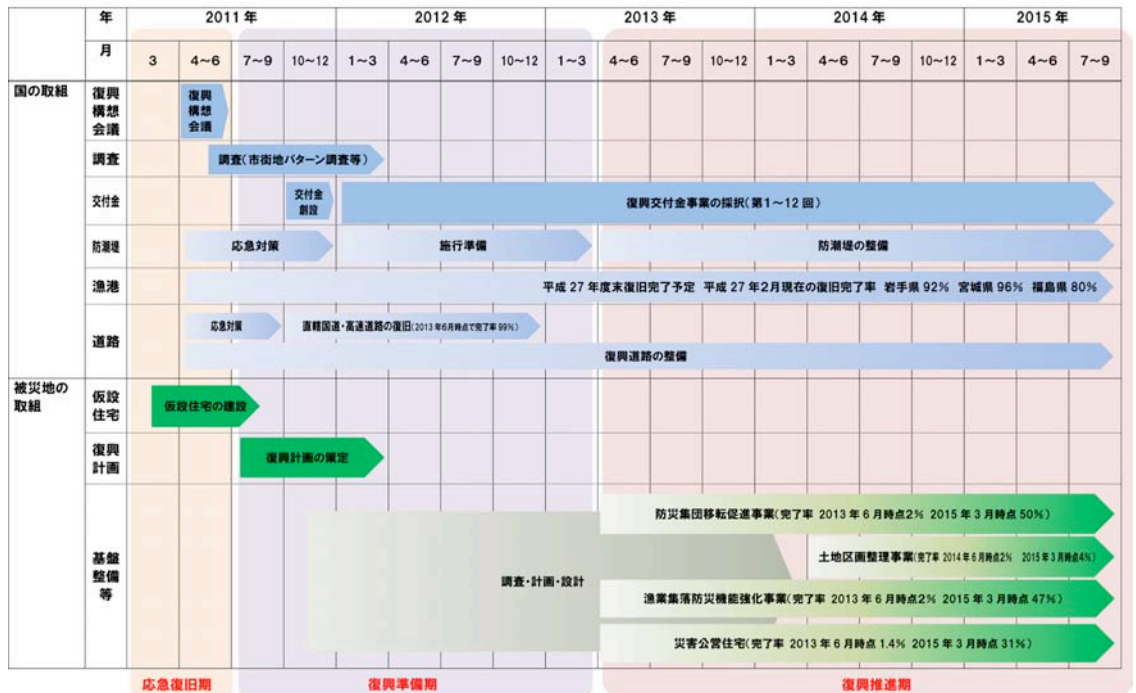
### (1) 震災復興タスクフォースの活動概要

応急復旧期、復興準備期、復興推進期に区分し、図1に国や地域の取り組み、図2にタスクフォースの取り組みを整理した。

タスクフォースは発災直後に組織を立ち上げ、応急復旧期・復興準備期は情報提供の仕組みづくりや提言、研究会活動、シンポジウム等の活動を実施してきた。

その後、復興推進期では多地域での現地支援に活動

図1 国や地域の復興の取り組み





(株)アルメックVPI主任研究員  
認定NPO日本都市計画家協会理事

内山 征

### ③専門家の立ち位置

今回、まちづくり系の専門家の活動が遅れたことは明確である。また、業務として携わった専門家とボランティアに携わった専門家の双方がいたが、地域との関わり方など、それぞれにメリット・デメリットがあった。専門家の関わり方・仕組みづくりが必要である。

### ④多様な支援者との関係づくり

各種NPO・NGOなどの多分野の支援者が被災地支援に入った。それらの支援者や行政とまちづくり専門家の役割分担・連携が重要になった。

場合によっては、現地に入っている支援者をまちづくり専門家が支援する体制も有効である。

### ⑤福島への支援

当協会では福島への支援活動を開始したが、現時点では大きな成果は得られていない。福島への支援は、今後も継続して実施していく必要がある。

### ⑥活動する人員の確保

当初タスクフォースには約50名のメンバーがいたが、現在の実働者は約10名である。資金や専門家の確保など、仕組みづくりが求められる。

マンパワーを増やす仕組みづくりが求められる。

### (3) まとめ

フォーラムの最後に、東京大学の小泉秀樹教授がまとめを行った。

東日本大震災後の4年間、時点、時点で判断をしながら活動を進めてきた。集中復興期間が終了することを踏まえ、タスクフォース、国、地域のこれまでの復興をしっかりと評価し、今後の東日本大震災の復興や南海トラフ等の次期災害対策につなげるべきであるという言葉で締めくくった。

### 3. 今後の展開

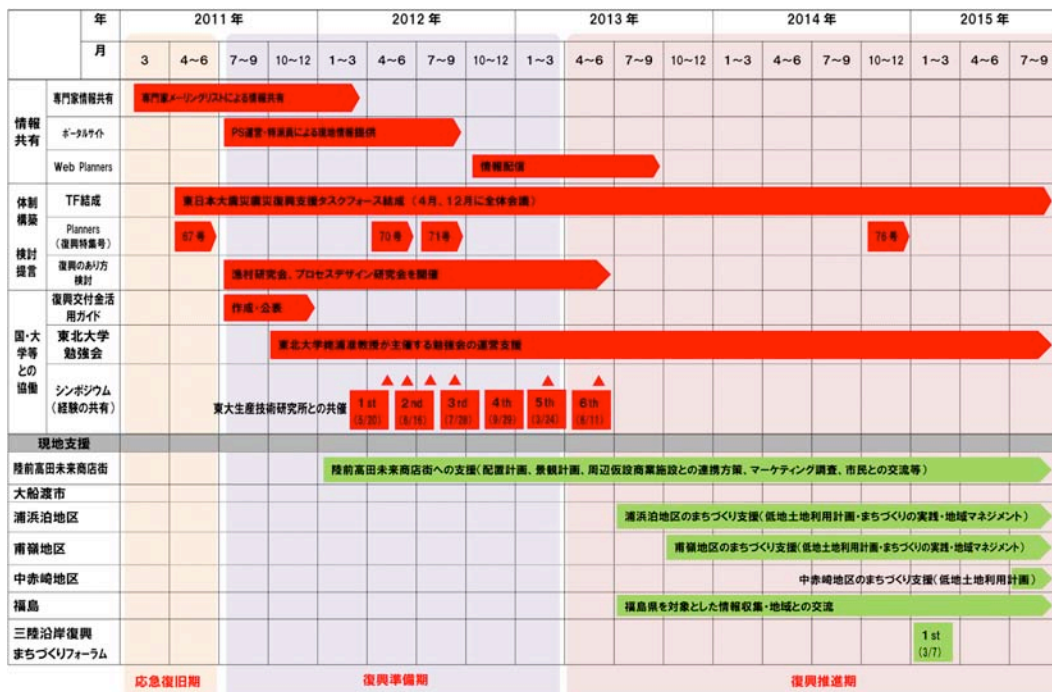
今後もタスクフォースでは、東日本大震災の復興支援活動を継続していく。

また、フォーラムのまとめにあるとおり、これまでの復興活動の評価・検証が必要である。

平成27年度より、タスクフォースでは「震災復興懇話会(地域に深く関わった方に地域ごとの詳細な情報を提供していただき意見交換を行う会)」を連続して開催し、評価・検証を行おうと考えている。

今後も震災復興タスクフォースの活動に、ご理解とご支援をいただけるようお願いする。

図2 震災復興タスクフォースの活動



## 『ejob 事業の普及と発展に向けて』

6年余りをかけて準備してきたejob事業（都市計画コンサルタント優良業務登録事業の略称）だが、都市計画4団体（日本都市計画学会、都市計画協会、都市計画コンサルタント協会、日本都市計画家協会）の共同事業としての準備が整い、試行段階に入ったため、全まち会議で広く議論した。事業の普及と発展を目指す機会として、運営委員会準備会からの説明に始まり、コンサルタントと地方公共団体（以下、自治体）からの見解や課題提起、国交省からも説明がなされた。

### ●ejob 事業とは何か？

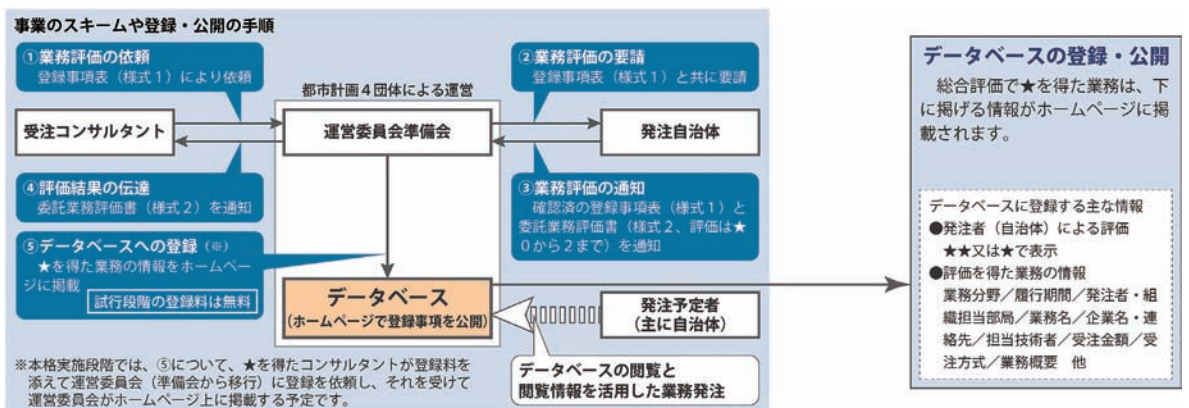
自治体が発注する都市計画コンサルタントの業務実績のうち優良なものを登録・公表することにより、コンサルタント業務の質的向上及び自治体における適切な業務発注の利便を図ることを目的とする。従来の自治体が発注する都市計画業務は、公募型業務発注方式を除き、各自自治体における過去の実績や他の自治体への問合せ、コンサルタントの営業等を踏まえ、幾つかのコンサルタントが抽出され、入札やプロポーザル等を通じ委託業務が発注されることが多い。そのため自治体がコンサルタントを抽出する際、優良な業務を遂行できるコンサルタントを広く知る機会が少なく、またコンサルタントにとっては優良な業務が当該自治体以外に広く社会的に評価される機会が少ないため、都市計画業務全体の質の向上が起きにくい状況にある。ejob 事業はこのような状況を打破するべく、自治体とコンサルタント双方にとって有益な制度として、平成27年10月より試行を開始した。

### ●ejob 事業の評価の仕組みは？

評価にあたっては、都市計画業務の自治体案件で、都市計画的な提案力を求める業務を対象（都市マスタープラン、土地利用計画、交通計画等、詳細は都市計画協会HPを参照）とし、コンサルタント側から業務発注した自治体へ評価依頼をし、自治体の担当部局が専門技術力、コミュニケーション力、成果の品質を5段階で評価、一定以上の評価を得たものをHP上のデータベースに☆印に換算して掲載する仕組みとなる。なお、この所要事務は、都市計画4団体が組織する運営委員会によって管理運営される。

### ●分科会ではどんな議論がなされたか？

自治体やコンサルタント、大学等の立場の参加者（パネリスト等8名、一般参加23名）から活発な議論がなされた。自治体の立場からは、担当者としての評価と客観的な評価のバランスの難しさ、発注者側の資質による評価の揺らぎ等の評価方法に対する意見の他、完了業務に評価の優劣をつけることについて、自治体内部の契約部門の理解を得にくい等の課題も出された。一方、コンサルタントの立場からは、評価結果の業務発注方式へのインセンティブ等、業務発注における評価の活用方法に対する意見があった。その他、都市計画の真の受益者は市民であり、市民評価が加味されるべき、都市計画は時間が経過して初めて評価される等の意見も出た。ejob 事業では都市計画そのものの評価でなく、自治体が業務実施上のコンサルタントを評価する制度との議論があり、ejob 事業に多くの自治体、コンサルタントが参加し、複数の自治体の評価の積み重ねで客観性が醸成され、制度が有意義なものとなるよう、多くの方々の参加が期待される。





## 「川から見る産業立地」

(株)ウォーク・ドント・ラン  
認定NPO日本都市計画家協会理事

千葉 葉子

### ■はじめに

ものづくり・まちづくり研究会は、都市計画に係る人々と、産業立地に係る人々がこれからの産業と都市、ものづくりについて協働的な検討を行うことを目的に平成21年に発足し、全まちでは開催都市を対象に分科会を行ってきました。

今回の東京大会では都市河川における工業地の形成を学ぶために現地調査を続け、当日の分科会では江戸・東京の川と工業地形成、4河川における産業変遷の報告をもとに意見交換を行いました。

#### I 趣旨説明 (土井幸平)

- II 報告 江戸・東京の川と工業地形成 (伊藤清武)  
石神井川 (伊藤清武)  
古川・渋谷川 (千葉葉子)  
江東内部河川 (内山 征)  
目黒川 (渡会清治)

#### III 意見交換 \*進行 (内山 征)

### ■概要

明治期に近代工業が芽生え東京の工業は発展しましたが、産業インフラとして、用水が河川水から工業用水に、輸送手段として舟運から鉄道、自動車へ変化し、川沿いの産業に大きな変化が起きつつある中、以下のような意見が出されました。

#### <東京の工業を残していくために>

- ・東京の工業は川沿いを基盤に立地してきたが、産業間の連携、人的な技術資源、ものづくりの風土などの産業コミュニティが形成され、そこには世界に誇る技術が蓄積されている。
- ・工場を残すための再開発(白金)、住宅の侵入をを整理する工業地区計画(板橋)が行われたが、都市は普遍の定理がないため個別解を他の川に当てはめるのは難しい。
- ・工業を残すことと工場経営は別のベクトル。

#### <ものづくりの新たな可能性について>

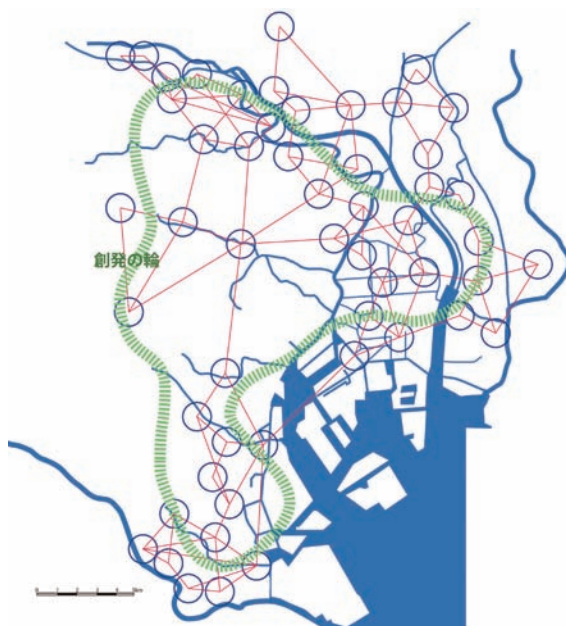
- ・東京には、既存の産業コミュニティに加えて、デザイナー、資金、マーケットなど、多様なものづくり

要素がある

- ・シェア工房(目黒)、ファブラボ(渋谷)のようなものづくり拠点が大きなインパクトの可能性に
- ・新たなものづくり拠点においては、工房と市街地が融合できる(公害等を心配しなくてよい)
- ・イメージの転換が必要(工具からデザイナー、町工場からファブラボなど)
- ・ものづくりコミュニティには、職人と情報ネットワーク、デザインとIT企業等、異業種や異分野における知と技の密な連携が求められている

#### <住・工・商、水辺の融合と新たな活動拠点へ>

- ・川沿いに立地してきた工場、それを含めて形成してきた工業集積地は産業創発のハブとなるまちである
- ・箇所(地区)ごとに特異な歴史・文化・生活があり、丁寧に残す、育てる取り組みが必要である



図：お宝マップ(産業創発のハブとなる工場集積地)

### ■最後に

ものまち研の中心メンバーであった越阪部和彦さんが、かねてから病気ご療養中のところ昨年11月19日に治療の甲斐なくご逝去されました。ものまち研の取り組みに対しご尽力いただきましたこと、様々な示唆をいただきましたこと、感謝を申し上げますとともに、ご冥福を深くお祈り致します。



武蔵野から編集室

野口 由紀子

## 緊急提言:庭の時代へ

3日(土) 16:00~「全国の美しいまちづくり実践から地方創生へ」10年間の全まち交流者の同窓会的会議  
 4日(日) 10:00~「美しいまちづくりパートII~花のおもてなし会議~」2020年を契機に緑花未来図会議

2004年3月20日「美しいまちづくり名古屋宣言」から私たちの美しいまちづくり活動&交流は始まった。  
 JSURP：美しいまちづくり研究会では、全国の草の根まちづくり活動家の実践発表と交流を目的に、毎年、全国まちづくり会議に参加し、交流を重ねてきた。11年目となる東京大会では、全国の「花と緑でまち・

ひと・くらしをつなぐ美しいまちづくり」実践者が一堂に集い、各成果を地域活性や地方創生に活かす秘訣や、活動の魅力を日本列島横断スタイルで語り合った。5年後を見据え、日本へ訪れる世界各国の方々への「花のおもてなし・美まち宣言」を草の根発美しいまちづくりとして東京大会で緊急提言した。

**全まち会議 2005**  
 第1回日比谷大会  
 子供とまちづくり  
 部門美まち奨励賞  
 九州：福岡市  
 JSURP 美しいまちづくり研究会  
 木村三重子

**2004年 愛地球博**  
 開催地で美まち宣言2005を行う。  
 10年後、チェルシーフリンジ2015WEB登録、国際交流へ  
 JSURP 緑花元気研究会 井上忠佳氏

**全まち会議 2008**  
 第4回美まち賞  
 北海道：恵庭市  
 恵み野商店会  
 内倉真祐美氏

**全まち会議 2007**  
 第3回美まち賞  
 東京都：小金井市  
 NPO 法人グリーン  
 ネットレス  
 東京大会世話役 野口由紀子

**3日：開催地ゲストスピーカー**  
 東京都：西東京市 NPO バース  
 佐藤留美氏  
 東京を自然共生都市へ！！

**4日：開催地ゲストスピーカー**  
 東京：小金井市  
 トランジション  
 タウン小金井  
 梶間陽一氏  
 美まち会議パートIIでは[環境映画]の放映もあり議論沸騰!!

**全まち会議 2009**  
 第5回美まち賞  
 川崎市幸地区まちづくり委員会  
 牧寛氏  
 美まち交流と全まち2009記念花壇作成

東大の秋花を摘み  
 フロアーを飾り、  
 懐かしい顔ぶれを  
 お迎えした全まち  
 東京大会無事終了

日本列島の“地みどり”を再認識し、  
 コミュニティガーデンが繋がって、  
 緑の力をまちづくりに活かそう！





# 「シネマティック・アーキテクチャ東京の描く都市・建築ヴィジョン」展

CAT ディレクター 緒方 恵一

シネマティック・アーキテクチャ東京 (CAT) が開催している現在進行中のワークショップ「建築の錬金術」\* (対象地：文京区本郷菊坂) を中心とする、実験工房内部における制作過程からの習作を展示した。

会場には、建築、映画、美術、音楽、都市計画や、都市工学、表象文化研究者、エンジニア、行政など様々な分野の方々に集まっていた。また、ハーヴァード大学や、東京大学都市工学専攻の研究室でも、同地に着目していることが他会場の展示で分かり、担当の先生とも今後の連携の可能性について話すことができた。さらに日本建築家協会 (JIA) の方からは、建築の領域を広げる試みとの評価を頂く。このように、新たな出会いや交流、プロジェクトの発展が全まちに関わる利点と言えよう。

同時に会場では、映画『光から沈黙へ、沈黙から光へ』(2015年リマスター版) の上映会 (トーク：建築家・齊木慶一氏) も開催。ヒロシマという原爆という影を持ちながらも未来へ向う宿命を負う都市について皆で語り合った。



「シネマティック・アーキテクチャ東京の描く都市・建築ヴィジョン」展

また、高岡市で開催される次回全国まちづくり会議では、そのまちを舞台に私たちの手法による短期のワークショップで、その地に貢献できる創造的なアイデア発見に協力できたらという話しがメンバー間で出たので、その実現を模索したい。

## \*実験的ワークショップ

「建築の錬金術 ALCHEMY OF ARCHITECTURE」：参加者は対象地から受けた印象をもとに映像を制作、物語を構築しながら数段階のプロセスを経た後、都市への提案を込めた別メディアの作品に転換させる。参加者は、都市の客観視や、自分の動機を明確化することができる。ロンドンAAスクールのパスカル・シェーニング研究室 (1991-2008) の“Cinematic Architecture 論”をCATが独自に発展させた理念に元づいており、2015年4月開始のシーズン1から現在はシーズン2へ継続中。参加は随時受付。建築、映像のスキルよりむしろ、都市に興味のある人や都市計画の担い手をめざす若い人たちの参加を期待している。詳しくは、ウェブサイト (<https://sites.google.com/site/cinematicarchitecturetokyo/>) をご参照下さい。



映画『光から沈黙へ、沈黙から光へ』(1995/2015)



## —3・11失われたものの大きさ！ そして！ 未来をつなぐ—

NPO ア！安全・快適街づくり・  
広域ゼロメートル市街地研究会 渡邊 喜代美

### 今回の問題提起“何か足りないもの”再考

何らかのソリューションを見いだそう、安全・快適な街、暮らしを考え、取り組んで14年余。多様な課題に向き合ってきたが“何か”不足も感じた。3・11後、訪問を続けるも、復興ままならず避難生活は続き、心や暮らしの平常化はむしろ悪化している側面もある。人びとは果敢に高台移転などに取り組むも、“何か足りないもの”を感じ、孤立感も高い。そんな時期、原発事故で全村避難している地域の「文化財SOS」「町史編纂」「古文書保存」「避難を余儀なくされた出身地のアイデンティティ」という記事。同時期に、南三陸「波伝谷に生きる人々」我妻監督と出会った。「波伝谷に生きる人びと」は、偶然にも吾らが継続訪問する被災エリアのアーカイブであった。この土地に生きた人々の暮らしの記録(2008年3月から2011年3月11日)が、エネルギーにあふれ、人の関係性の豊かな日常が収録されていた。我妻映画や全村避難記事は“何か足りないもの”の再考の機会となった。度々被災エリアを訪れる吾らも、地元の暮らしをどこまで想像したか。阪神・淡路大震災から20年も経つが、レジレンス作法の構築はできていない。風土、文化、歴史、人の関係性の豊かさが、否定されない、未来へ繋がるものなのだ、という感性が共有できなければ、あたらしいまち、都市の未来はない。未経験の被災から未経験の復興へ。「輪中会議」の課題“持続可能な社会や暮らし”へ。展開する気づきもしたい。

### “ベースは人”風土を読み解いて未来へ生かす

セッションで、東京大学の加藤孝明さんは、防災とか復興のことを研究しているときに、2つ、ずっとひっかかりがある。今日、映像を見て、これはひとつの大きなヒントだ。一つは、工学系の都市計画理論は、物事を単純化、モデル化し、わかった気になる理論。かなりをそぎ落として、本質と思われる根幹の部分だけで組み立てる。基本、近代都市計画、まちづくりはそうであった。いろいろな地域に入ってみると、理論でそぎ落とされる部分にこそ、本質が隠されている。復興は特にそう。複雑なものを単純化してとらえることに限界を感じていた。複雑なものを複雑なまま受け止めた。アーカイブしていくというのも一つの方法だ。もう一つは、時間軸。自然災害も、長い歴史のなかのものと捉えらえる。そう考えると、自然災害リスクとどう共生しながら、長い歴史をつくっていくのか、という本来の議論になると思う。大学では単純化して教えるが、このことの限界、矛盾を強く感じた。今回の復興のやり方を見ると、まさに、今挙げた、2点、時間軸のとらえ方と、単純化した物事の理解に基づいて進めることの限界、防災至上主義の悪いことが如実に出てい

る。自身のホームページをつくる時、冒頭に「人がいて、地域がある。地域は人の生活において不変である」と書いた。今日の映像を見ても、人なんです。ベースは、改めて、感じた。

南三陸町の後藤一磨さんは、人口減少、経済の縮小は、限界集落につながる悪い現象と受け止めがち。歴史を見ると、波伝谷集落が40戸だった時代は、全てが1次産業で受け止められていた。今、再び40戸に戻った。今の私たちが、自然の中で生きていける状況になった、ということではないか。今、インターネットを使えば、牡蠣を世界に売ることも出来る。減少のなかで、希望を見出せる。お祭りや行事は、平常時には楽しみだが、今は破壊分断された集落人を寄せる一つの手立てだ。被災した戸倉神社を修復して来年4月には、神輿を担いでお祭りをする。集落の再生に活用しようと考えている。それと同じような役割が、映画「波伝谷に生きる人びと」にはあると思う。

監督の我妻さんは、波伝谷の人たちは、映画として評価していない。当事者として、部落のアイデンティティについて、考え方の違いがあつて、ゆらぎながらも、それに願いを込める。地域でどう生かすか。地元や宮城県沿岸で縦断上映会をやった。震災前の映像を見ることで、自分たちの地域を振り返ることができる、当事者たちは感謝し、生かそうとしている。

セッションを共に企画した東大の塩崎さんは、地理的、空間的に即したコミュニティに僕は属していない。「地域」の言葉の意味というか、重さが、中川さん(葛飾の町会長)や一磨さんとは違う。僕にとっての地域とはなにか。人々にとって、どういう意味があるのか。東京は、「地域」を持つ人、持たない人が、交じり合っている。どうやって、「地域」をつくってあげればいいか。

横浜市役所の色田さんは、映画で、地域社会で暮らす人々が実感している将来についての課題意識から、長い時間軸が見えてきた。「まち」「地域」という、長い時間存続してつづいていく上で必要な視点だ。ただ、やはり個人・短期の視点も、同時に必要だ。地域と結び付けば、確かに長い時間軸が存在する。地域を離れた人はどうだろうか。長い歴史軸の中で考えること、個人個人の人生・生活の視点で考えることとの関係性について、整理してみたい。

コーディネータ渡邊：ソリューション(その1)キーワード「人・風土」。短時間ながら問題提起ができた。朝ドラの“まれ”さんの言葉「ふるさとって、場所じゃなくて、人だと思ふ」という回想は、おそらく正しい。和辻哲郎“風土とは単なる自然環境ではなくして、人間の精神構造の中に刻み込まれた自己了解の仕方に他ならない”。今後の議論が楽しみだ。

## 東北カフェ&マルシェ 及びランチセッション

株式会社フロントヤード 関口 泰子

東日本大震災から約4年が経過している中、震災復興に向けて「食」という地域資源を活用し、生業とすることで地域の価値を高める新たな取り組みを実践す

る事業者が育ちつつある。今回、その事業者の方々にカフェ&マルシェを開催頂き、ランチセッションとして活動内容をご紹介頂いた。

### 東北カフェ & マルシェ

気仙沼スローフード部、気仙沼波止場を中心としたメンバーにより東北にゆかりのある食材によるカフェ&マルシェを実施。軽食や物販の販売を行った。

【メニュー】アンカーコーヒー・/桑茶/焼きドーナツ/おにぎり(鮭ほぐし、鰹ほぐし)/気仙沼コッペパン/ホヤワッフル/ゆずワッフル/焼き鳥/鮫串/ジョーズラー油/メカジキラー油/ぶり缶/ぶり中骨缶/おつまみ昆布/フカヒレスープ/VOAR LUZジャム/オリジナルハーブティー/海ごはん(ふりかけ)/気仙沼ばーちゃんのピリ辛麺だれ 等



### ランチ タイム セッション

災地にて先進的に活動を実践している3名から実践の中での課題や今後の可能性についてお話頂いた。

- ①株式会社ボアラス佐藤春佳氏  
「その地域でしか出来ないモノゴトや地域文化について」
- ②気仙沼波止場(わーふ) 松尾康弘氏  
「地方と地方を繋ぐ取り組みとして「けせんぬま百貨店」と新名物による気仙沼の賑わいづくりについて」
- ③株式会社アイ・フィールド 石原綾子氏  
「ネットワークを活かした6次産業化の取組について」



3名の共通点として『地域住民の声をしっかり聴き、地域住民が望むもの』を考え提供する重要性が挙げられた。

東北は「食」や「農」以外にも多くの資源に恵まれている土地ではあるが、これらの資源を活かすのはやはり「人」であり、東北の最も魅力的な資源は「人」であると捉えていることがわかった。

3名の取組みは、人と人が繋がるための場所を「人」が作り、育て、受け継ぐサイクルを『食』や『農』というツールを使って実践しているものであった。

震災復興を契機に「人」という資源を軸に「食」と「まち」を掛け合わせて地域でイノベーションを起こすことが地域のパワーにつながっているということを感じたセッションであった。

## 広域まちづくり・ 地域密着まちづくり

認定NPO日本都市計画家協会理事 平井 一步  
株式会社地域計画連合 田嶋 麻美

### ●参加団体

地域密着あるいは都市圏レベルで活動している下記の団体がパネルを出展し、丸数字がついている10団体が車座交流会に参加した。

①東京都都市づくり公社／株式会社総合資格／②政治都市政策研究会／③NPO横浜にLRTを走らせる会／株式会社リコー／JSURP美しいまちづくり研究会／東京文化資源区ハーバード大学ワークショップ／恵み野商店会／④小田原laboratory／⑤深沢・桜新町さくらフォーラム／淡路瓦工業組合／⑥高浜市商工会／⑦NPOア!安全・快適街づくり／新井信幸研究室 + あすと長町復興支援ボード／共育：フラワーアップスクール／⑧豊間区・ふるさと豊間復興協議会／⑨玉浦西まちづくり検討委員会・玉浦西まちづくり住民協議会／NPOグリーンネクレス／⑩株式会社安井建築設計事務所ほか

100年後、東京では近代都市計画による都市構造(都市計画道路網・指定容積率)が200年かけて一定の完成見込みとのことである(②)。一方、都内でも防災をはじめ様々な課題を抱えている市街地が存在し、東日本大震災を受けて改めて生活地の再構築に取り組んでいる所もある。

そのような状況のなか、「都市の未来」をどう考えるのか。各団体の発表・意見交換の中からヒントとなりそうな言葉を(かなり強引に)拾ってみた。

### ●都市の未来をつくるヒント

#### 1) 都市に新たな動きをつくり出す

現在の都市には、効率性や管理が優先され、利用者にとって優しいとは言えない環境がある。既存のまちに新たな価値観や動きを取り入れて行く試みとして、小田原では公共空間を市民の居場所として活用していく取組みをボトムアップ型で行っている(プレイスメイキング)(④)。また、都市の移動環境に目を向けると、横浜では乗換えのしやすさや観光客のわかりやすさという視点からNPOによりLRTの普及活動が行われている(③)。

#### 2) 安全・安心なまちづくり

近年ますます重要視されている防災性については、水害に対して「自分たちで何ができるか」から考え出し、多様な活動主体に展開している葛飾区の事例

(⑦)、再開発による木密エリアの防災性改善(⑩)などが挙げられた。

#### 3) 過去から現在へのつなぎ

次代のまちづくりにおいては、地域の特徴を翻訳しつつ時代の変化とどうすり合わせていくかが重要となる。高浜市では地場産業の三州瓦を手がかりに歴史的なまちなみの維持や産業振興に取り組もうとしている(⑥)。関東初の郊外分譲住宅地である桜新町では、今後のまちを考えていくためにこれまでの百年史をとりまとめた(⑤)。月島の再開発では、木造長屋から超高層ビルへと建築形式を変化させながらも、内部には路地空間の名残をピロティで再構築している(⑩)。

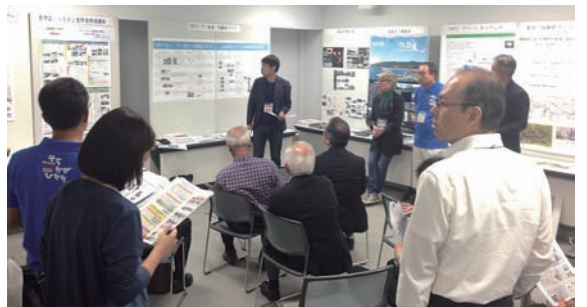
#### 4) 復興まちづくりの現場から

被災市街地の再生においては、上記が顕著に問われる。いわき市豊間地区では、住民が主体となって区画整理の検討を行い、プラットホームや仮設店舗などの活動を通してコミュニティと産業の再生に挑んでいる(⑧)。岩沼市玉浦西地区では、学区内への集約的な集団移転、地元スーパーの誘致などが相まってコンパクトシティ化を実現しているようにも見える(⑨)。

### ●都市の未来をつくる主体

全まちの開催趣旨(草の根まちづくり)から当然とも言えるが、未来の都市をつくるのは住民自身という流れが定着している印象を受けた。これら活動を支える制度も、インフラ整備型から既成市街地再生型へ、また、その主体である住民活動支援型へとスライドしている(①)。

専門家であるプランナーについても、行政と住民の間に立つ翻訳家、市街地再生のコーディネーターなど従来からの役割に加え、行政職員の有志や大学と一体で自主的な実施主体として活動している若手の事例も見られた(④)。





## まちづくり支援組織・ 韓国まちづくり

東海大学工学部准教授 梶田 佳孝

練馬まちづくりセンター所長 小場瀬 令二

### ●参加団体

まちづくり支援組織及び韓国でまちづくり活動している13団体がパネルを出展し、その内、以下の番号のある12団体が車座交流会に参加した。

- (1) 日本都市計画家協会ルーフスケープ事業・日本屋根外装工事協会／(2) 一般社団法人都市防災不燃化協会／(3) 一般財団法人都市農地活用支援センター／(4) 市民まちづくり支援・都市ネットワーク会議／(5) 一般財団法人世田谷トラストまちづくり／(6) 公益財団法人名古屋まちづくり公社名古屋都市センター／(7) 公益財団法人練馬区環境まちづくり公社・練馬まちづくりセンター／熊本まちなみトラスト／(8) いたばし総合ボランティアセンター／(9) 韓国まちづくり全国ネットワーク／(10) 江陵市まちづくり支援センター／(11) 生演劇 Life Is Drama／(12) 京畿道タボク共同体支援センター

日本グループ、韓国グループの順番に各団体から各自の取り組みについての発表・質疑を行い、意見交換を行った。以下は各団体の大まかな発表内容である。カッコ内の番号は、上記の団体である。

- (1) 日本の伝統の瓦を高材として、古い街並保全だけでなく、震災復興、景観により観光客の集客に努めている。
- (2) 不燃木材を使った耐火建築物によるまちづくりを提案。防災・減災(特に首都直下型地震や東南海沖地震に対する備え)に加え、人にやさしい木の文化の再生も目指している。
- (3) 「農ある暮らしづくり」の普及・啓発を目指したアドバイザー派遣事業の紹介や都市農地の保全・活用の提案。
- (4) 全国各地のまちづくり団体をつなぎ、連携し協働することで、蓄積してきたノウハウを高めあうための年1～2回開催されるネットワーク会議の7年間の取り組み。
- (5) 市民緑地制度、近代建築調査保全活動、空き家・空き部屋の地域貢献活用の制度等の取り組み。
- (6) まちづくり活動助成、まちづくりびと養成講座、中川運河助成などのまちづくり活動支援の取り組み。
- (7) 3軒からはじめられる景観まちなみ協定、まちづくり活動助成事業等の取り組み。

- (8) いたばし学校の取り組み、災害関連グッズの展示・販売、手作りボランティアの作品の展示・販売の現状。
- (9) 韓国各地で活動するまちづくりグループのネットワークの紹介。
- (10) 市民が主導する2018年冬期五輪対応計画の準備のための300人の討論会の取り組みのプロセス。
- (11) 離島である文甲島の住民たちの生活と住民とともに祭りを開催するにいたったプロセス。
- (12) 2015年6月に開所したばかりの京畿道タボクコミュニティサポートセンターの運営組織体制と各主体の支援と能力の向上などの事業の紹介。

各参加団体とも大変熱のこもった発表と積極的な意見交換があった。意見交換では、韓国グループのメンバーから、日本におけるまちづくり助成審査の方法、市民の審査員はどのように選んでいるかの審査委員の選定方法、団体の年間予算、事業費の内訳はどうか、人件費はどれくらいか、事業は法律に位置付けられているのかの質問があった。また、交流会中に韓国のメンバーが、いたばし総合ボランティアセンターの手作りボランティアの作品をその場で購入するなど、和やかな雰囲気の中、意見交換が行われた。

本車座交流会におけるポスターセッション形式での発表、意見交換等により、日本と韓国のまちづくりの現状について相互理解がある程度できる機会となり、次の日に行われた日韓まちづくりセンターフォーラムでの議論・交流につながる下地になったのではないと思われる。

予定時間を相当超過し、時間管理が不十分で反省するところもあるが、活発で非常に充実した交流会となった。



## 全まち東京の成果と意義

認定NPO日本都市計画家協会会長 小林 英嗣

「都市の未来を考える」をメインテーマにした『全国まちづくり会議2015 in 東京』のメインディッシュは三つ。オープニングは、今、都市に強く求められている新しい力である「オープン・イノベーション」や「イノベーション・エコシステム」をキーワードにし、社会と都市に求められる波頭を捉えた基調講演（野城教授／東大副学長）と高鍋理事が切り込み隊長を務めたパネルディスカッション。次いで、都市計画分野で「理論と実践の融合」を実践する次世代のプランナーを表彰してきた楠本洋二賞受賞者による総括的フォーラムでは、これまでの理論と実践の広がりや奥行き、今日の地域社会が希求する都市計画を巡る領域の多様性と展望が語られた。三つ目は、今大会スタートさせた「JSURP レジェンドトーク」。JSURP 創設期のプランナーが関わり創りあげてきた「大きく、長い、骨太の物語」を総括的にレビューしつつ、これからチャレンジすべき課題と展望を戦略的に整理し、若き世代へ語りかけた。わが国のプランナー第一世代と第三・第四世代との刺激的な交流の始まりであった。そして、12の多様なアラカルトディッシュは、初めての国際フォーラムを含め、まさに満韓全席。東京開催のなせる業なのか。

ここでもう一度、2005年にスタートした全まちの来し方を整理しつつ、NPO日本都市計画家協会3.0を展望してみたい。

### 1) JSURP1.0(全国都市再生まちづくり会議)

2005年、伊藤滋会長(当時/現:名誉会長)を座長とし、黒川洸委員長の体制で開催された日比谷大会はビッグ・バン。全国各地で草の根まちづくりで実績を挙げているまちづくり衆(通称17人衆)が全国各地で活躍していたとびっきりのキーマンに呼びかけスタートした‘元祖全まち’。当時の小泉首相も参加し、NPOとしてシンボリックな内容であった。2006(常盤大会)、2007(新宿大会)と東京開催され、日比谷宣言が全国各地の活動家諸氏へと受け継がれ、展開されていった。草の根まちづくりが具体的に動き出した実感と継続性への責任感が共有された。黒川体制下で回を重ねることができ、①NPO法人としての都市計画家協会の理念と活動方針の継承、②地域の自立的で多様な草の根まちづくり活動への意識と行動への共感、③新しい公共としての主体性と成果、課題解決への知の交流などが、太い骨として共有され、‘コミュニティ感覚に根ざした都市計画’や‘コミュニティ醸成型まちデザイン’について情報交流が深化された。特に地方都市における活動は確かなものとなり、2007年に「地方との交流」を決断。基幹事業化し、地方大会と東京大会の交互開催がスタートした。

### 2) JSUP2.02(全国まちづくり会議)

初の地方開催の全国まちづくり会議2008は小都市・恵庭で開催され、「全まちの転換期(エポック)に」との理解のもと、‘シームレスで楽しく’を理念に加え、東京開催のイベント型全まちに加えて、地域と全国活動家のシームレス(定常的)な交流を意図した地域大会の試行は、本部研究会(東京中心)の活動内容を地域社会(地方都市)に公開・連携した‘公開型公益的活動’としての‘新しい活動の萌芽も確認でき、会員主体の家協会がバナナスが機能し始め、熊本(2010)、神戸(2012)、長岡(2013)、北上(2014)と地方開催が継続、全国的交流が展開されてきた。

### 3) JSURP3.0の基点(全まち2015 in 東京)

全まちがスタートした2005年、スウェーデンでは世界初の「持続可能な開発省」が誕生した。わが国でも失われた20年(特に後半)、私たち都市計画家協会も含む、都市開発・都市計画・都市づくりに関連する諸学協会では、これまでのミッションや社会的位置づけと、これからの新たな位置づけや活動内容、そしてミッションの再確認や再構築、そして会員数の減少への対応などについて多様な議論が行われ、社会・都市の持続可能性と同様、学協会の組織や活動の「持続可能性」が問われ続けてきた。

2011.3.11は日本が抱えていた多くの問題を顕在化させ、同時に、都市の開発・計画に関わる多くの分野と領域には、多くの疑問と社会課題が突きつけられた。私たち日本都市計画家協会のメンバーも、いきなり転換点に投げ出され、同時に、新たな行動展開も模索・実行してきた。その中間総括の意味もあり、昨2014年の全国まちづくり会議を北上市で開催し、「復興のまちづくりを考える」をテーマとした。

2015東京大会は、4年半経過した東北復興を背景とした国土・都市の強靱性や復元力、スマートシユリンクと消滅可能都市(消滅都市なる新タイプゲームも出現)、地方創生、コミュニティ(社会)デザイン、社会システム・デザイン、共通価値の創造(CSV)などなどの多様な社会ニーズ、そして都市の計画領域を取り巻く社会動態を背景にしての久しぶりの東京開催であった。東京大会2015では、多くの参加者の方々は、全まちが‘何かが変わった’あるいは‘変わりつつある’と感じられたのではないだろうか。

パリでカフェが出来たのは1768年、フランシスコ・プロコピオが「カフェ・プロコップ」を創設し、社会の変動・変革の中心には常にカフェがあった。当時のカフェは「異端・自由な人々」が集う場所であり、イノベーションの生



まれる場所であった。考えと行動を刺激しあい、時には扶助しあう場として、カフェは機能していた。

カフェは「サロン」とは違う。社会的地位を度外視する」という一点では、カフェとサロンは似ている。が、サロンは「女主人」が私財をなげうって議論を切り盛りする場であり、思想と行動の自由がなくなる可能性もあった。しかし、カフェは、集う人々が、自ら身銭を切ってくる場であり、思想的自由が守られ、自由闊達な議論と行動が切磋琢磨によって、イノベーションが起き、社会を動かし、発展する力と強さを持っている「創造の場」であった。

皆さんが感じられた「何かが変わった」内容とは、自由な『創造の場』JSURPの姿ではないだろうか？ 社会をイノベートしようとする無頼・自由人の集う場＝カフェとしてのJSURPではないだろうか？ 私は、このJSURPイノベーションの胎動と心地よい風を「全まち2015 in 東京」で感じた。ぜひ、今年10月の「全まち2016 in 高岡」でも「創造の場の魅力」を体感していただきたい。

また、北海道をはじめ、全国の支部の皆さんも「サロンからカフェ」への脱却とイノベーションをはかり、新たな風を巻き起こしていただきたい。

## 次回全国まちづくり会議の開催にあたって

高岡市 都市計画課長

赤坂 忠良



この度、次回「全国まちづくり会議」の開催を高岡市に決定していただいたことに心から感謝申し上げます。

当市は、富山県西部に位置し、人口約17.5万人の富山県第2の都市であり、平成17年11月に旧高岡市と旧福岡町が合併して現在の高岡市が誕生しました。

古くは奈良時代に越中国府が置かれ、天平18年には万葉集の代表的歌人である大伴家持が国守として当地に赴任し、在任5年の間に二上山や雨晴海岸などの風光明媚を愛でて詠んだ220首余りの秀歌を万葉集に残しております。毎年10月には、3昼夜かけて万葉集全4516首を読み上げる、万葉集朗誦の会を開催しております。



万葉集朗誦の会

近世に入ってからには加賀藩2代藩主前田利長公によって慶長14年(1609年)に高岡城が築かれ、高岡が開町しましたが、一国一城令により廃城となり、その後は、武家のまちから商工業を中心とした町人のまちとして発展し、銅器、漆器、仏壇、仏具などの数多くの伝統産業を生み出しました。以来、400年にわたり「ものづくりの技と心」を受け継ぎ、時代の流れの中で創意工夫を積み重ねながら、富山県西部の中核都市として発展してまいりました。この加賀前田家ゆかりの町民文化については、平成27年4月に日本遺産の認定を受けたところ



金屋町(千本格子の家並み)

ながら、富山県西部の中核都市として発展してまいりました。この加賀前田家ゆかりの町民文化については、平成27年4月に日本遺産の認定を受けたところ

現在、中心市街地に位置する高岡駅では、橋上駅舎化等の全面的なリニューアルから1周年を迎え、近代的な駅前として市民の皆様が親しまれており、さらに、高岡駅前東地区においても新たな再開発事業が進んでおります。一方、市内には歴史都市高岡としての主要な構成要素となっている2つの重要伝統的建造物群保存地区(山町筋、金屋町)や高岡城跡(古城公園)、富山県内唯一の国宝である瑞龍寺や高岡大仏などの歴史的な街並みや歴史的遺産が数多く残っています。



高岡大仏

また、平成27年3月14日には、半世紀にわたる市民の悲願でありました北陸新幹線が開業し、「飛越能(飛騨、越中、能登)の玄関口」として、人・モノ・情報の流通体系が大きく変貌を遂げ、経済活動や市民生活の圏域が飛躍的に拡大することとなりました。

これからの高岡市は、この北陸新幹線開業の追い風を最大限に活かし、本市独自の歴史的・文化的資源を磨き、つなぐことで、「まちの魅力」を創り出し、新たな文化を創造する「文化創造都市高岡」の実現を目指したいと考えています。

こうした中、「全国まちづくり会議」は、まちづくりの専門家やまちづくりに関わる市民団体の方々、市民の皆様などと一緒に将来の高岡のまちづくりについて考える良い機会になるものと期待しております。開催地の決定にあたり、様々な面からご配慮いただきました関係者の皆様に厚くお礼を申し上げるとともに、貴協会の発展と会員の皆様のご活躍をご祈念申し上げます。



2015年10月1日～2016年2月29日

## 協会の動向

<2015年10月>

- 19日 Jsurrpまちづくりカレッジ(福祉)
- 20日 Jsurrpまちづくりカレッジ(エリア防災)
- 21日 ejob事業打合せ  
交流・広報委員会
- 22日 Jsurrpまちづくりカレッジ(プレイスメイキング)
- 26日 震災復興懇話会③
- 27日 自転車まちづくり研究会

<2015年11月>

- 1日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 2日 Jsurrpまちづくりカレッジ(プレイスメイキング)
- 4日 ejob事業事務局会議
- 6日 震災復興支援タスクフォース赤崎チーム打合せ
- 7日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 9日 都市計画連続セミナー第15シリーズ①  
Jsurrpまちづくりカレッジ(エリア防災)
- 10日 Jsurrpまちづくりカレッジ(福祉)
- 11日 Jsurrpビジョン検討会
- 14日 オリピックレガシシーシンポジウム
- 17日 ejob事業事務局会議  
第137回理事会
- 19日 Jsカフェ
- 20日 Jsurrpまちづくりカレッジ(エリア防災)
- 23日 Jsurrpまちづくりカレッジ(福祉)
- 26日 都市計画連続セミナー第15シリーズ②
- 27日 農商工連携による地域プロジェクト支援研究会  
Jsurrpまちづくりカレッジ(プレイスメイキング)

<2015年12月>

- 2日 都市計画連続セミナー第15シリーズ③
- 4日 Jsurrpまちづくりカレッジ(プレイスメイキング)
- 8日 Jsurrpまちづくりカレッジ(福祉)
- 9日 ものづくりまちづくり研究会  
Jsurrp運営会議  
震災復興支援タスクフォース(越喜来)打合せ
- 10日 街なか研究会
- 11日 ejob事業コア会議
- 13日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 18日 街なか研究会  
事務所大掃除
- 19日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 21日 Jsurrpまちづくりカレッジ(エリア防災)

<2016年1月>

- 7日 交流・広報委員会
- 8日 震災復興支援タスクフォース中赤崎地区打合せ  
震災復興支援タスクフォース全体会議
- 9日 Jsurrpまちづくりカレッジ中村×小泉対談
- 12日 Jsurrpまちづくりカレッジ(プレイスメイキング)
- 13日 ejob事業事務局会議
- 14日 農商工連携による地域プロジェクト支援研究会  
Jsurrpまちづくりカレッジ(福祉)
- 17日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 18日 震災復興懇話会④
- 19日 第138回理事会
- 20日 仮説市街地研究会
- 26日 全まち2016実行委員会①
- 27日 Jsurrpまちづくりカレッジ(エリア防災)
- 29日 Jsカフェ

<2016年2月>

- 3日 仮説市街地研究会
- 4日 Jsurrpまちづくりカレッジ企画会議
- 8日 ejob事業事務局会議  
震災復興懇話会⑤
- 9日 震災復興支援タスクフォースプレセッション
- 11日 シネマティックアーキテクチャ東京
- 16日 第139回理事会
- 17日 仮説市街地研究会
- 19日 認定都市プランナー選考委員会  
Jsカフェ
- 23日 全まち2016実行委員会②
- 24日 仮説市街地研究会
- 26日 路地協世話人会

2015年10月1日～2016年2月29日

## 会員の動向

★入会者2名(賛助個人2名)

賛助個人会員:吉次翼、田嶋麻美



Japan Society of Urban and Regional Planners  
認定NPO日本都市計画家協会

【Planners●都市計画家】2016年4月1日発行

編集● 認定NPO日本都市計画家協会/Planners編集長:佐谷和江  
編集委員:内山征 江井仙佳 高鍋剛 中川智之 鴨川美紀 後藤純  
【交流・広報委員長】渡会清治 【北海道支部】矢野ひろ 【静岡支部】丸山正仁  
【横浜支部】田島泰 【福岡支部】牧敦司

制作● 認定NPO日本都市計画家協会 デザイン●スタジオガンボ

発行● 認定NPO日本都市計画家協会  
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2丁目10番地 香取ビルアネックス2階  
TEL 03-6273-7491 / FAX 03-6273-7492